

IBM® DB2 Universal Database™



DB2 Personal Edition 概説およびインストール

バージョン 8.2

IBM® DB2 Universal Database™



DB2 Personal Edition 概説およびインストール

バージョン 8.2

ご注意！

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GC09-4838-01
IBM® DB2 Universal Database™
Quick Beginnings for DB2 Personal Edition
Version 8.2

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1993-2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

第 1 部 DB2 Personal Edition について	1
第 1 章 DB2 Personal Edition 製品の概要	3
第 2 部 旧バージョンの DB2 Personal Edition からの移行	5
第 2 章 DB2 Personal Edition の移行 (Windows)	7
DB2 Personal Edition の移行 (Windows)	7
移行タスク	7
DB2 Personal Edition の移行の準備 (Windows)	7
DB2 Personal Edition 上のデータベースの移行 (Windows)	10
第 3 章 DB2 Personal Edition の移行 (Linux)	13
DB2 Personal Edition の移行 (Linux)	13
移行タスク	13
DB2 Personal Edition の移行の準備 (Linux)	13
DB2 Personal Edition 上のインスタンスおよびデータベースの移行 (Linux)	16
第 3 部 DB2 Personal Edition のインストール	19
第 4 章 DB2 Personal Edition のインストール (Windows)	21
インストールの概要	21
DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)	21
DB2 グループおよびユーザー	22
インストール要件	27
DB2 Personal Edition のインストール要件 (Windows)	27
ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)	29
ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)	29
DB2 Personal Edition の DB2 セットアップ・ウィザードの開始 (Windows)	30
第 5 章 DB2 Personal Edition のインストール (Linux)	33
インストールの概要	33
DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)	33

NIS インストールの注意点	34
デスクトップ・アイコンの変更 (Linux)	35
DB2 グループおよびユーザー	36
インストール要件	36
DB2 Personal Edition のインストール要件 (Linux)	36
ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)	37
DB2 セットアップ・ウィザードの開始 (Linux)	38

第 4 部 インストール後のタスク . . . 41

第 6 章 DB2 フィックスパックのインストール	43
最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)	43

第 7 章 DB2 サーバーのインストールの検査	45
コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査	45
ファースト・ステップを使用した DB2 サーバーのインストールの検査	45

第 8 章 DB2ADMNS および DB2USERS ユーザー・グループへのユーザー ID の追加	49
---	-----------

第 5 部 クライアント/サーバー接続の構成 51

第 9 章 構成アシスタントを使用した接続の構成	53
構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成	53
データベース接続の構成	54
Windows および Linux 上での構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の構成	54
構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動構成	56
プロファイルによるデータベース接続の構成	57
ディスカバリーによるデータベース接続の構成	58
Windows および Linux 上でのディスカバリーを使用したデータベース接続の構成	60

第 10 章 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用した接続の構成	63
コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成	63
ノードのカタログ	64

DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ	64
DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ	65
クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ	66
CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ	67
CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト	69

第 6 部 付録 71

付録 A. 言語サポート 73

DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)	73
DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)	74
サポートされる DB2 インターフェース言語	74
別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID	75

付録 B. DB2 の除去 77

DB2 UDB のアンインストール (Windows)	77
DB2 UDB のアンインストール (UNIX)	78
DB2 Administration Server (DAS) の停止	79
DB2 Administration Server (DAS) の削除	79
DB2 インスタンスの停止	80
DB2 インスタンスの削除	81
db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)	81

付録 C. DB2 Universal Database の技術情報の概要 83

DB2 資料とヘルプ	83
DB2 資料の更新	83
DB2 インフォメーション・センター	84
DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ	86
DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)	88
DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)	91
DB2 インフォメーション・センターの呼び出し	94

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール	95
DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示	96
DB2 PDF 資料および印刷された資料	97
DB2 の基本情報	97
管理情報	98
アプリケーション開発情報	99
ビジネス・インテリジェンス情報	100
DB2 Connect 情報	100
入門情報	100
チュートリアル情報	101
オプション・コンポーネント情報	101
リリース・ノート	102
PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法	103
DB2 の印刷資料の注文方法	104
DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す	104
コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す	106
コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す	106
コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す	107
DB2 チュートリアル	107
DB2 トラブルシューティング情報	108
アクセス支援	109
キーボードによる入力およびナビゲーション	109
アクセスしやすい表示	110
支援テクノロジーとの互換性	110
アクセスしやすい資料	110
ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム	110
DB2 Universal Database 製品の共通基準認証	113

付録 D. 特記事項 115

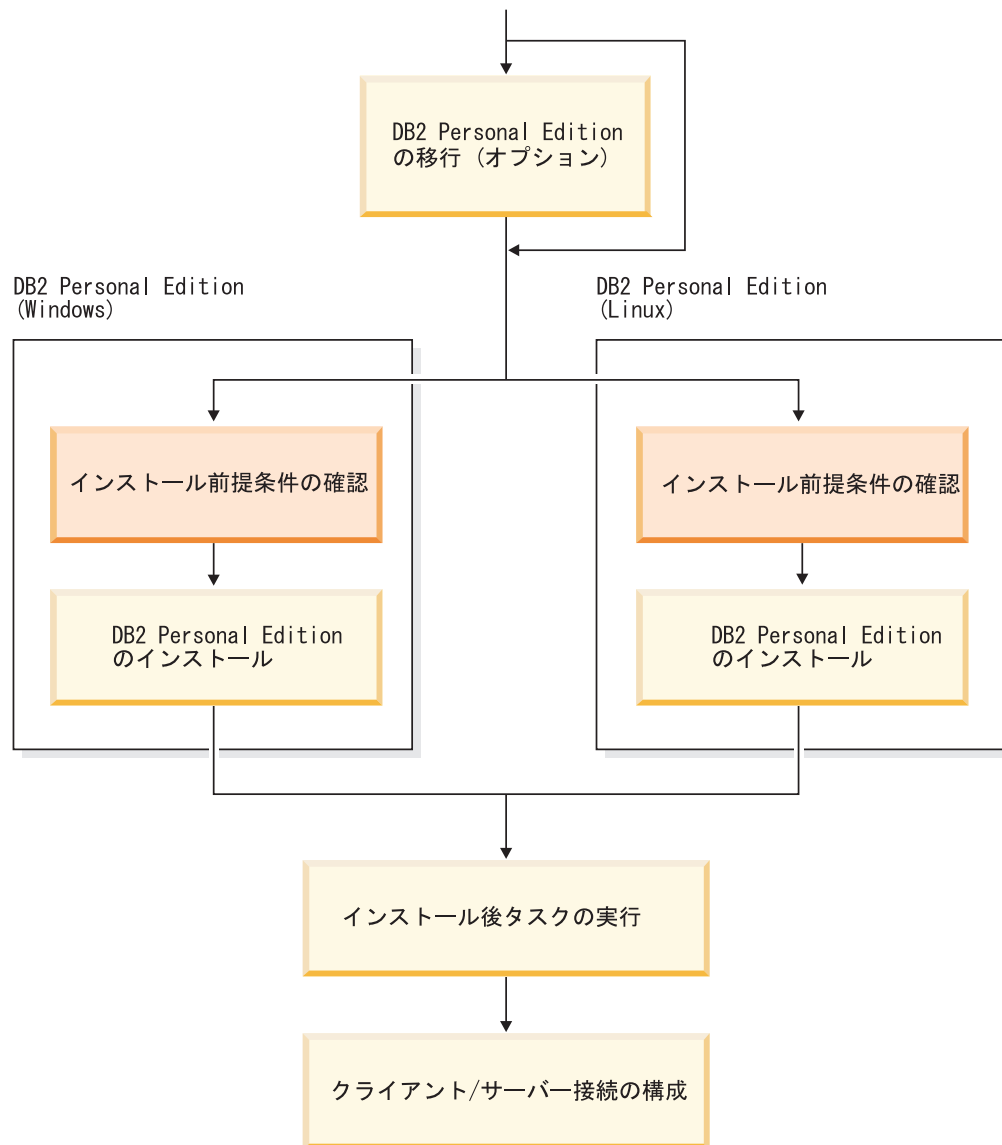
商標	117
----	-----

索引 119

IBM と連絡をとる 123

製品情報	123
------	-----

第 1 部 DB2 Personal Edition について



第 1 章 DB2 Personal Edition 製品の概要

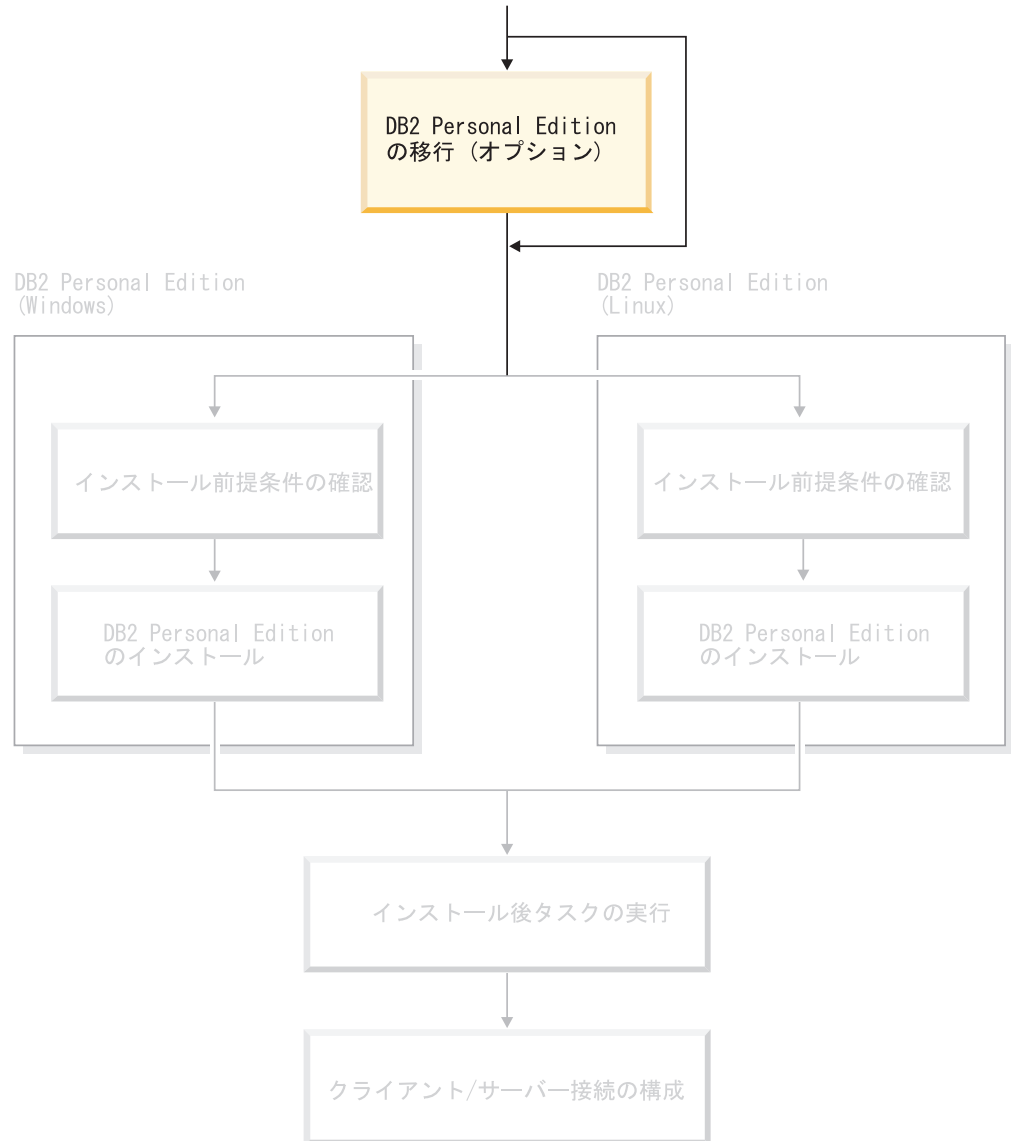
| DB2® Personal Edition は、シングルユーザー・バージョンの DB2 です。これは、
| ローカル・データベースを作成および管理するのに使用できます。また、DB2 デー
| タベース・サーバーや DB2 Connect™ サーバーに接続するクライアントとして使用
| できます。

また DB2 Personal Edition は、サテライトとして機能することもでき、DB2
Enterprise Server Edition データベース・サーバーからリモート管理されます。サテ
ライト環境での DB2 Personal Edition の使用に関する詳細は、サテライト管理のド
キュメンテーションを参照してください。

関連資料:

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の
『Application Development Client』

第 2 部 旧バージョンの DB2 Personal Edition からの移行



第 2 章 DB2 Personal Edition の移行 (Windows)

DB2 Personal Edition の移行 (Windows)

このトピックでは、Windows 上の旧バージョンの DB2 Personal Edition からの移行に必要なステップを説明します。既存のバージョンの DB2 Personal Edition がある場合は、以下の指示を利用すると、DB2 バージョン 8 への移行に役立ちます。

旧バージョンの DB2 からの移行には、インストール前およびインストール後のタスクが関係しています。

前提条件:

DB2 バージョン 8 のインストール要件をシステムが満たしていることを確認してください。

制約事項:

DB2 バージョン 6.x または DB2 バージョン 7.x からの移行のみがサポートされます。

手順:

旧バージョンの DB2 Personal Edition から移行するには、以下のステップを実行します。

1. DB2 Personal Edition の移行の準備を行います。
2. DB2 Personal Edition のインストールを行います。
3. DB2 Personal Edition 上のデータベースの移行を行います。

関連タスク:

- 7 ページの『DB2 Personal Edition の移行の準備 (Windows)』
- 21 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』
- 10 ページの『DB2 Personal Edition 上のデータベースの移行 (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB の移行 (Windows)』

関連資料:

- 27 ページの『DB2 Personal Edition のインストール要件 (Windows)』

移行タスク

DB2 Personal Edition の移行の準備 (Windows)

このトピックでは、Windows 上の旧バージョンの DB2 Personal Edition からの移行の準備に必要なステップを説明します。

前提条件:

- データベースをバックアップするには、データベースに対する SYSADM、SYSCTRL、または SYSMANT 権限が必要です。

制約事項:

DB2 バージョン 6.x または DB2 バージョン 7.x からの移行のみがサポートされます。

手順:

移行のためにご使用のシステムを準備するには、以下のステップを実行します。

1. 移行しようとするすべてのデータベースがカタログされていることを確認します。現行のインスタンスにあるすべてのカタログされたデータベースのリストを表示するには、次のように入力します。

```
db2 list database directory
```

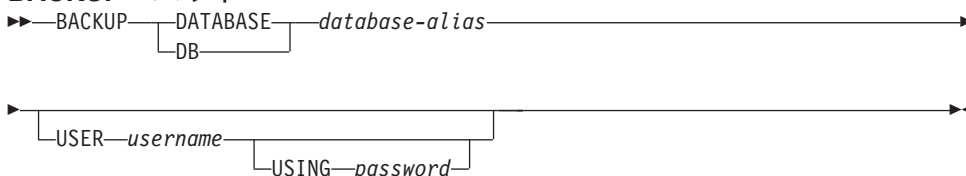
2. すべてのアプリケーションおよびユーザーの接続を切断します。現在のインスタンスのすべてのデータベース接続のリストを表示するには、 **db2 list applications** コマンドを入力してください。すべてのアプリケーションが切断されると、このコマンドは次のメッセージを戻します。

```
SQL1611W No data was returned by the Database System Monitor.  
SQLSTATE=00000
```

db2 force applications コマンドを発行すれば、アプリケーションとユーザーの接続を強制的に切断することができます。

3. 次のようにして **backup database** コマンドを使用して、ローカル・データベースをそれぞれバックアップします。

BACKUP コマンド



ここで、

DATABASE *database-alias*

バックアップするデータベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースのバックアップに使用するユーザー名を識別します。

USING *password*

ユーザー名を認証するのに使用するパスワードを指定します。パスワードを省略した場合、入力するようプロンプトで指示されます。

4. **db2licd -end** コマンドを入力して、DB2 ライセンス・サービスを停止します。
5. Windows 2000 (またはそれ以降のオペレーティング・システム) では、このサービスが失敗したら再始動するようにこのサービスのプロパティを設定することができます。いずれかの DB2 サービスに対して *restart on failure* オプションを設定した場合、先に進む前にこのオプションを使用不可にする必要があります。

6. コマンド行プロセッサを実行していた各セッションで **db2 terminate** コマンドを入力して、すべてのコマンド行プロセッサ・セッションを停止します。
7. すべてのアプリケーションとユーザーの切断と、データベースのバックアップが完了したら、 **db2stop** コマンドを入力してデータベース・マネージャーを停止します。
8. **db2ckmig** コマンドを入力して、現在のインスタンスによって所有されているデータベースが移行可能になったことを確認します。 **db2ckmig** コマンドは、DB2 バージョン 8 の製品 CD-ROM 上の `¥db2¥Windows¥utilities` ディレクトリーに置かれています。 **db2ckmig** コマンドを使用すると、必ず次のようになります。
 - データベースは不整合な状態になりません。
 - データベースはバックアップ・ペンディング状態になりません。
 - データベースはロールフォワード・ペンディング状態になりません。
 - 表スペースは正常な状態になります。

DB2CKMIG コマンド

```

▶ db2ckmig database_alias /l drive:¥path¥filename
    |
    |-----/e-----|
    |
    |-----/u----userid----/p----password-----|
  
```

ここで、

database_alias

移行を検査されるデータベースの *database_alias* 名を指定します。このパラメーターは、*/e* パラメーターが指定されない場合に必要です。

/e

すべてのカタログ・データベースの移行を検査することを指定します。このパラメーターは、*database_alias* パラメーターが指定されない場合に必要です。

/l drive:¥path¥filename

データベースのスキャンによって生成されたエラーと警告のリストを保持するための、ドライブ、ターゲット・パス、およびファイル名を指定します。 *path* 変数は任意指定です。パスを指定しないと、**db2ckmig** コマンドの実行元になるパスが使用されます。 *filename* は指定する必要があります。

/u userid

データベースに接続するためのユーザー・アカウントを指定します。CONNECT 権限がないユーザーとしてログオンしている場合には、このパラメーターは指定されていなければなりません。

/p password

データベースに接続するためのユーザー・アカウントのパスワードを指定します。CONNECT 権限がないユーザーとしてログオンしている場合には、このパラメーターは指定されていなければなりません。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』

関連タスク:

- 21 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『BACKUP DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2ckmig - データベース事前移行ツール・コマンド』

DB2 Personal Edition 上のデータベースの移行 (Windows)

このトピックでは、Windows 上の旧バージョンの DB2 Personal Edition からの移行の実行のためのインストール後にとる必要のあるステップを説明します。

前提条件:

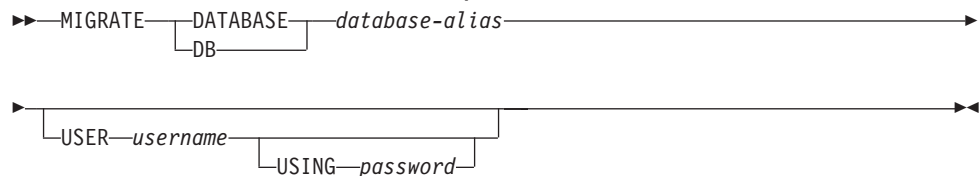
- データベースを移行するには、SYSADM 権限が必要です。

手順:

DB2 Personal Edition のインストールが完了したら、データベースを移行して移行プロセスを完了する必要があります。データベースを移行するには、以下のステップを実行します。

1. SYSADM 権限を持つユーザー・アカウントでログインします。
2. データベースをバックアップします。
3. **db2 migrate database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 MIGRATE DATABASE コマンド



ここで、

DATABASE *database-alias*

現在インストールされているバージョンのデータベース・マネージャーに移行するデータベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースの移行に使用するユーザー名を識別します。

USING *password*

ユーザー名を認証するのに使用するパスワードを指定します。ユーザー名を指定し、パスワードを省略した場合、入力するようプロンプトで指示されます。

4. オプション: 統計を更新します。データベースの移行が完了したとき、照会のパフォーマンスを最適化するために使用されていた旧統計は、カタログ内に保存されています。ただし、DB2 バージョン 8 には、改良された統計や、DB2 バージョン 6 または DB2 バージョン 7 にはなかった統計もあります。これらの統計の利点を活用するには、表に対して **runstats** コマンドを実行すると良いでしょう。SQL 照会のパフォーマンスに対して重大な影響のある表の場合は特にお奨めします。

5. オプション: パッケージを再バインドします。データベースを移行すると、既存のパッケージはすべて無効になります。移行プロセス後に各パッケージは、バージョン 8 データベース・マネージャーによって最初に使用されるときに再作成されます。あるいは、**db2rbind** コマンドを実行し、データベースに格納されているすべてのパッケージを再作成することもできます。
6. オプション: PUBLIC からの SQL データ・アクセスを備えた外部ストアード・プロシージャで、EXECUTE 特権を取り消します。データベースの移行時に、すべての関数、メソッド、および外部ストアード・プロシージャの EXECUTE 特権が PUBLIC に対して認可されます。この場合、SQL データ・アクセスの入った外部ストアード・プロシージャで機密漏れが生じることになります。この外部ストアード・プロシージャを使用すれば、ユーザーは本来なら特権の対象にはなりえない SQL オブジェクトにアクセスできるようになります。特権を取り消すには、**db2undgp - r** コマンドを入力します。

移行中に、データベース構成パラメーター *maxappls* は自動的に設定されます。これを別の値に設定したい場合は、手動で更新する必要があります。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『MIGRATE DATABASE コマンド』

第 3 章 DB2 Personal Edition の移行 (Linux)

DB2 Personal Edition の移行 (Linux)

このトピックでは、Linux 上の旧バージョンの DB2 Personal Edition からの移行に必要なステップを説明します。

旧バージョンの DB2 からの移行には、インストール前およびインストール後のタスクが関係しています。

前提条件:

移行プロセスを開始する前に、DB2 バージョン 8 のインストール要件をシステムが満たしていることを確認してください。

制約事項:

DB2 バージョン 6.x または DB2 バージョン 7.x からの移行のみがサポートされます。

手順:

旧バージョンの DB2 Personal Edition から移行するには、以下のステップを実行します。

1. DB2 Personal Edition (Linux) の移行の準備を行います。
2. DB2 Personal Edition (Linux) のインストールを行います。
3. DB2 Personal Edition (Linux) 上のインスタンスおよびデータベースの移行を行います。

関連タスク:

- 13 ページの『DB2 Personal Edition の移行の準備 (Linux)』
- 33 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』
- 16 ページの『DB2 Personal Edition 上のインスタンスおよびデータベースの移行 (Linux)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 36 ページの『DB2 Personal Edition のインストール要件 (Linux)』

移行タスク

DB2 Personal Edition の移行の準備 (Linux)

このトピックでは、Linux 上の旧バージョンの DB2 Personal Edition からの移行の準備に必要なステップを説明します。

前提条件:

- データベースをバックアップするには、データベースに対する SYSADM、SYSCTRL、または SYSMANT 権限が必要です。

制約事項:

DB2 バージョン 6.x または DB2 バージョン 7.x からの移行のみがサポートされます。

手順:

移行のためにご使用のシステムを準備するには、以下のステップを実行します。

1. 移行しようとするすべてのデータベースがカタログされていることを確認します。現行のインスタンスにあるすべてのカタログされたデータベースのリストを表示するには、次のように入力します。

```
db2 list database directory
```

2. すべてのアプリケーションおよびユーザーの接続を切断します。現在のインスタンスのすべてのデータベース接続のリストを表示するには、 **db2 list applications** コマンドを入力してください。すべてのアプリケーションが切断されると、このコマンドは次のメッセージを戻します。

```
SQL1611W No data was returned by the Database System Monitor.  
SQLSTATE=00000
```

db2 force applications コマンドを発行すれば、アプリケーションとユーザーの接続を強制的に切断することができます。

3. インスタンス所有者としてログオンしてから、 **db2ckmig** コマンドを入力して、現在のインスタンスによって所有されているデータベースが移行可能になったことを確認します。 **db2ckmig** コマンドは、DB2 バージョン 8 の製品 CD-ROM 上の `¥db2¥common` ディレクトリーに置かれています。 **db2ckmig** コマンドを使用すると、次の状態を確保します。
 - データベースは不整合な状態になりません。
 - データベースはバックアップ・ペンディング状態になりません。
 - データベースはロールフォワード・ペンディング状態になりません。
 - 表スペースは正常な状態になります。

DB2CKMIG コマンド

```
▶db2ckmig database_alias /l logfile  
└─/e  
  
└─/u userid /p password
```

ここで、

database_alias

移行を検査されるデータベースの *database_alias* 名を指定します。このパラメーターは、*/e* パラメーターが指定されない場合に必要です。

/e

すべてのカタログ・データベースの移行を検査することを指定します。このパラメーターは、*database_alias* パラメーターが指定されない場合に必要です。

/l logfile

データベースのスキャンンによって生成されたエラーと警告のリストを保持するための、ドライブ、ターゲット・パス、およびファイル名を指定します。 path 変数は任意指定です。パスを指定しないと、db2ckmig コマンドの実行元になるパスが使用されます。 filename は指定する必要があります。

/u userid

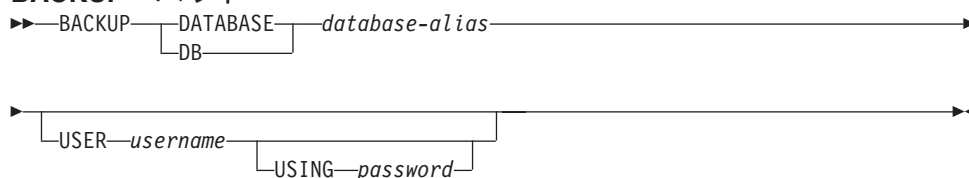
データベースに接続するためのユーザー・アカウントを指定します。CONNECT 権限がないユーザーとしてログオンしている場合には、このパラメーターは指定されていなければなりません。

/p password

データベースに接続するためのユーザー・アカウントのパスワードを指定します。CONNECT 権限がないユーザーとしてログオンしている場合には、このパラメーターは指定されていなければなりません。

4. 次のようにしてデータベースのバックアップ・コマンドを使用して、ローカル・データベースをそれぞれバックアップします。

BACKUP コマンド



ここで、

DATABASE database-alias

バックアップするデータベースの別名を指定します。

USER username

データベースのバックアップに使用するユーザー名を識別します。

USING password

ユーザー名を認証するのに使用するパスワードを指定します。パスワードを省略した場合、入力するようプロンプトで指示されます。

5. **db2licd -end** コマンドを入力して、DB2 ライセンス・サービスを停止します。
6. コマンド行プロセッサを実行していた各セッションで **db2 terminate** コマンドを入力して、すべてのコマンド行プロセッサ・セッションを停止します。
7. すべてのアプリケーションとユーザーの切断と、データベースのバックアップが完了したら、**db2stop** コマンドを入力してデータベース・マネージャーを停止します。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』

関連タスク:

- 21 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『BACKUP DATABASE コマンド』

- 「コマンド・リファレンス」の『db2ckmig - データベース事前移行ツール・コマンド』

DB2 Personal Edition 上のインスタンスおよびデータベースの移行 (Linux)

このトピックでは、Linux 上の旧バージョンの DB2 Personal Edition からの移行が完全にインストールした後に取る必要のあるステップを説明します。完全なコマンド情報については、関連リンクを参照してください。

前提条件:

- インスタンスを移行するには、root 権限が必要です。
- データベースを移行するには、SYSADM 権限が必要です。

手順:

DB2 Personal Edition のインストールが完了したら、インスタンスとデータベースを移行して移行プロセスを完了する必要があります。インスタンスとデータベースを移行するには、以下のステップを実行します。

1. **db2imigr** コマンドを使用して、次のようにインスタンスを移行します。
 - a. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
 - b. **db2imigr** コマンドを使用して、次のようにインスタンスを移行します。

```
DB2DIR/instance/db2imigr [-u fencedID] InstName
```

ここで、

DB2DIR

Linux オペレーティング・システム上の /opt/IBM/db2/V8.1 です。

-u fencedID

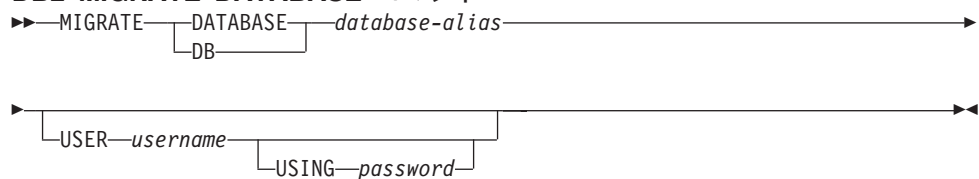
fenced ユーザー定義関数 (UDF) およびストアド・プロシージャを実行するユーザーです。このオプションを使用するのは、クライアント・インスタンスをサーバー・インスタンスに移行する場合のみです。サーバーからサーバーや、クライアントからクライアントへの移行ではこのオプションは必要ありません。

InstName

インスタンス所有者のログイン名です。

2. SYSADM 権限を持つユーザー・アカウントでログインします。
3. データベースをバックアップします。
4. **DB2 MIGRATE DATABASE** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 MIGRATE DATABASE コマンド



ここで、

DATABASE *database-alias*

現在インストールされているバージョンのデータベース・マネージャーに移行するデータベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースの移行に使用するユーザー名を識別します。

USING *password*

ユーザー名を認証するのに使用するパスワードを指定します。ユーザー名を指定し、パスワードを省略した場合、入力するようプロンプトで指示されます。

- オプション: 統計を更新します。データベースの移行が完了したとき、照会のパフォーマンスを最適化するのに使用されていた旧統計は、カタログ内に保存されています。ただし、DB2 バージョン 8 には、改良された統計や、DB2 バージョン 6 または DB2 バージョン 7 にはなかった統計もあります。これらの統計の利点を活用するには、表に対して **runstats** コマンドを実行すると良いでしょう。SQL 照会のパフォーマンスに対して重大な影響のある表の場合は特にお奨めします。
- オプション: パッケージを再バインドします。データベースを移行すると、既存のパッケージはすべて無効になります。移行プロセス後に各パッケージは、バージョン 8 データベース・マネージャーによって最初に使用されるときに再作成されます。あるいは、**db2rbind** コマンドを実行し、データベースに格納されているすべてのパッケージを再作成することもできます。
- オプション: PUBLIC からの SQL データ・アクセスを備えた外部ストアド・プロシージャで、EXECUTE 特権を取り消します。データベースの移行時に、すべての関数、メソッド、および外部ストアド・プロシージャの EXECUTE 特権が PUBLIC に対して認可されます。この場合、SQL データ・アクセスの入った外部ストアド・プロシージャで機密漏れが生じることになります。この外部ストアド・プロシージャを使用すれば、ユーザーは本来なら特権の対象にはなりえない SQL オブジェクトにアクセスできるようになります。特権を取り消すには、**db2undgp - r** コマンドを入力します。

移行中に、データベース構成パラメーター *maxappls* は自動的に設定されます。これを別の値に設定したい場合は、手動で更新する必要があります。

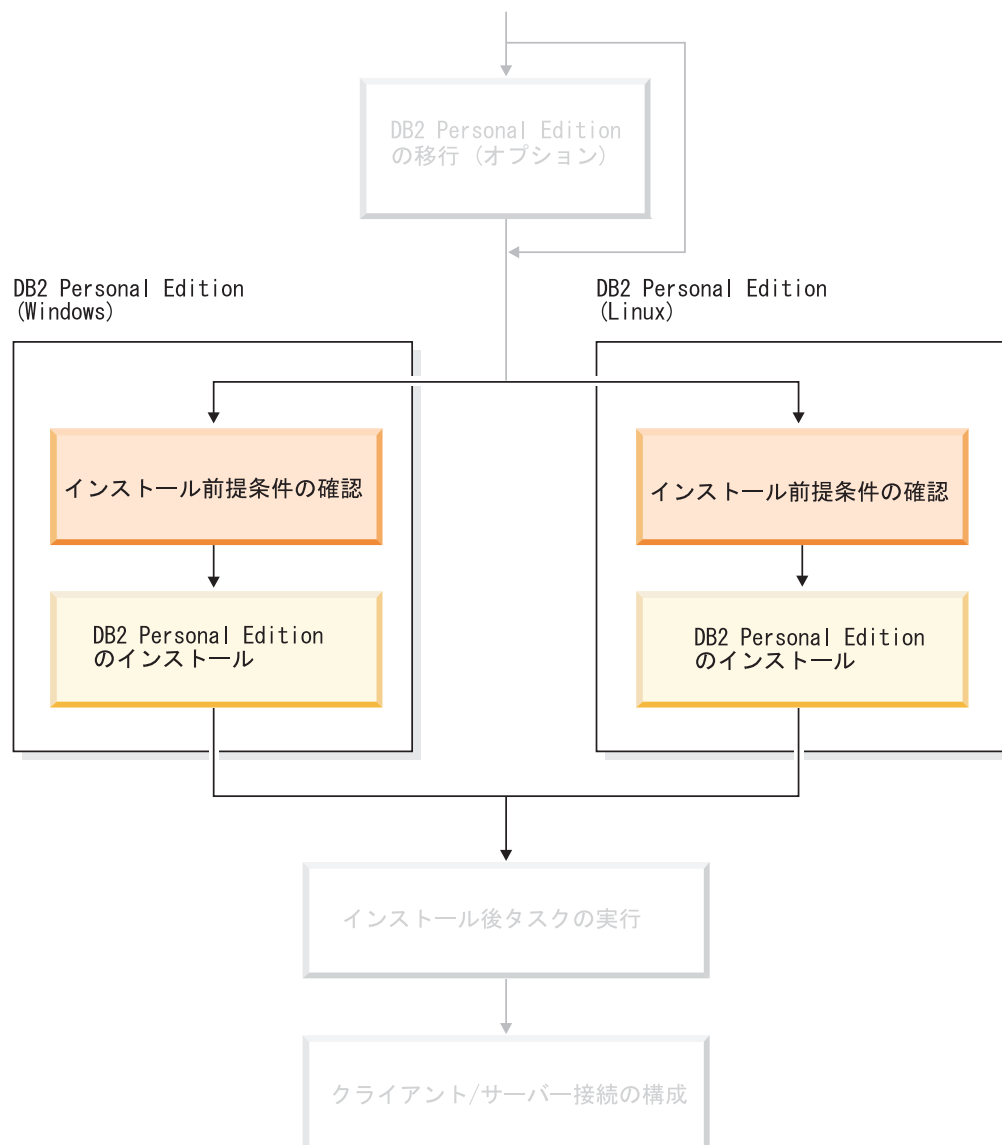
関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『MIGRATE DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2imigr - インスタンスの移行コマンド』

第 3 部 DB2 Personal Edition のインストール



第 4 章 DB2 Personal Edition のインストール (Windows)

インストールの概要

DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)

このトピックでは、Windows に DB2 Personal Edition をインストールするためのステップの概要を述べます。

手順:

DB2 Personal Edition を Windows にインストールするには、以下のステップを実行します。

1. DB2 Personal Edition の前提条件を調べます。ご使用のコンピューターが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ディスクとメモリー、およびインストール要件。
 - DB2 Personal Edition のインストールとセットアップ用のユーザー・アカウント。インストールには 1 つ、セットアップには 2 つのユーザー・アカウントが必要です。セットアップに必要なユーザー・アカウントは、インストール前に作成することもできますし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。同一のユーザー・アカウントを使用して、DB2 のすべての要件を満たすことができます。
 - Windows® 2000 または Windows Server 2003 上にインストールする場合に、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用する予定であれば、Windows 2000 または Windows Server 2003 のディレクトリー・スキーマを拡張して、DB2 オブジェクト・クラスと属性定義を装備できるようにします。
2. DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Personal Edition のインストールを行います。DB2 セットアップ・ウィザードの機能は以下で構成されます。
 - インストールの注意書きやリリース情報と、DB2 バージョン 8 の機能の解説を表示するのに使用できる DB2 セットアップ・ランチパッド。
 - 標準、コンパクト、およびカスタムのインストール・タイプ。表示されるインストール選択項目は、選択するインストール・タイプによって異なります。
 - 複数言語のインストール・サポート。
 - DB2 Administration Server のセットアップ (DAS ユーザーのセットアップを含む)。
 - 管理連絡窓口とヘルス・モニターの通知のセットアップ。
 - インスタンスのセットアップと構成 (インスタンス・ユーザーのセットアップを含む)。
 - DB2 ツール・カタログおよびウェアハウス・コントロール・データベースのセットアップ。

- 応答ファイルの作成。ご使用のインストール選択項目を応答ファイル中に保管しておき、後でインストールに使用したり、別のコンピューター上にインストールを複製したりすることができます。

3. オプション: DB2 インフォメーション・センターをインストールします。

関連概念:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB のインストール方式 (Windows および UNIX)』

関連タスク:

- 30 ページの『DB2 Personal Edition の DB2 セットアップ・ウィザードの開始 (Windows)』
- 91 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストールとセットアップ用のユーザー・アカウント』
- 27 ページの『DB2 Personal Edition のインストール要件 (Windows)』

DB2 グループおよびユーザー

ユーザー権限の付与 (Windows)

このトピックでは、Windows オペレーティング・システムでユーザー権限を付与するのに必要なステップを説明します。DB2 のインストールとセットアップに必要なユーザー・アカウントごとに、それぞれ個別のユーザー権限が推奨されています。

前提条件:

Windows 上で高度なユーザー権利を付与するには、ローカル管理者としてログオンしなければなりません。

手順:

Windows NT

1. 「スタート」をクリックし、「プログラム」->「管理ツール (共通)」->「ドメイン ユーザー マネージャ」を選択します。
2. 「ユーザー マネージャ」ウィンドウでは、メニュー・バーから「原則」->「ユーザーの権利」を選択します。
3. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウでは、「高度なユーザー権利の表示」チェック・ボックスを選択してから、「権利」ドロップダウン・ボックスで、付与したいユーザー権利を選択します。「追加」をクリックします。
4. 「ユーザーとグループの追加」ウィンドウで、権利を付与したいユーザーまたはグループを選択し、「OK」をクリックします。

5. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで、「この権利を与えられたアカウント」リスト・ボックスから追加したユーザーまたはグループを選択し、「OK」をクリックします。

Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003

1. 「スタート」をクリックし、「設定」->「コントロール パネル」->「管理ツール」を選択します。

注: Windows XP および Windows Server 2003 コンピューターでは Windows Theme によってはこれは、「設定」->「コントロール パネル」->「パフォーマンスとメンテナンス (Performance and Maintenance)」->「管理ツール」になります。

2. 「ローカル セキュリティ ポリシー」を選択します。
3. 左のウィンドウ区画で、「ローカル ポリシー」オブジェクトを拡張し、「ユーザー権利の割り当て」を選択します。
4. 右のウィンドウ区画で、割り当てたいユーザー権利を選択します。
5. メニューから、「操作」->「セキュリティ...」を選択します。
6. 「追加」をクリックし、権利を割り当てるユーザーまたはグループを選択し、「追加」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

注: Windows 2000 または Windows Server 2003 ドメインに属するコンピューターの場合、ドメイン・ユーザー権限がローカル設定をオーバーライドする可能性があります。その場合、ネットワーク管理者がユーザー権限を変更しなければなりません。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ユーザー、ユーザー ID、およびグループの命名規則』

関連タスク:

- 21 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』

関連資料:

- 24 ページの『DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストールとセットアップ用のユーザー・アカウント』

DB2 UDB システム管理者グループ (Windows)

デフォルトでは、アカウントが定義されているコンピューター上の管理者グループに属する有効な DB2® ユーザー・アカウントすべてにシステム管理 (SYSADM) 権限が認可されます。アカウントがローカル・アカウントである場合、ローカル管理者グループに属していなければなりません。アカウントがドメイン・アカウントである場合、ドメイン・コントローラーにある管理者グループに属していなければなりません。

たとえば、ユーザーがドメイン・アカウントにログオンし、DB2 データベースにアクセスしようと試みる場合、DB2 はドメイン・コントローラーに移動してグループ (管理者グループも含む) を列挙します。レジストリー変数 **DB2_GRP_LOOKUP=local** を設定し、ドメイン・アカウント (またはグローバル・グループ) をローカル管理者グループに追加すれば、常にローカル・コンピュータ上のグループ検索を DB2 に強制実行させることができます。

ドメイン・ユーザーの場合、SYSADM 権限を持つには、ドメイン・コントローラーで管理者グループに属していなければなりません。DB2 は常に、アカウントが定義されるマシンで許可を実行するので、サーバー上でローカル管理者グループにドメイン・ユーザーを追加しても、ドメイン・ユーザーの SYSADM 権限をこのグループに付与することにはなりません。

ドメイン・ユーザーをドメイン・コントローラーの管理者グループに追加しないようにするには、グローバル・グループを作成し、SYSADM 権限を付与したいドメイン・ユーザーをこのグローバル・グループに追加してから、このグローバル・グループの名前を持つ DB2 構成パラメーター SYSADM_GROUP を更新します。これを実行するには、次のコマンドを入力します。

```
db2stop
db2 update dbm cfg using sysadm_group global_group
db2start
```

関連タスク:

- 21 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストールとセットアップ用のユーザー・アカウント』

DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)

Windows NT、Windows 2000、Windows XP、または Windows Server 2003 にインストールする場合には、以下の DB2 サーバー・ユーザー・アカウントが必要です。

- 1 つのインストール・ユーザー・アカウント
- 1 つ以上のセットアップ・ユーザー・アカウント
 - 1 つの DB2 Administration Server (DAS) ユーザー・アカウント
 - 1 つの DB2 インスタンス・ユーザー・アカウント

インストール・ユーザー・アカウントは、DB2 セットアップ・ウィザードの実行に先立って定義する必要があります。セットアップ・ユーザー・アカウントは、インストールの前に定義することもできますし、DB2 セットアップ・プログラムに作成させることもできます。

すべてのユーザー・アカウント名は、ご使用のシステムの命名規則と DB2 命名規則に従ったものでなければなりません。

Windows 上の DB2 拡張セキュリティー:

現在 DB2 は拡張 Windows セキュリティーを備えています。ユーザー ID を使用して DB2 をインストールできますが、そのユーザー ID が DB2ADMNS または DB2USERS グループのいずれかに属していない場合は、そのユーザー ID は DB2 コマンドを実行できません。

これらの 2 つの新しいグループは、DB2 インストーラーによって作成されます。新しい名前、または、デフォルト名を使用できます。

このセキュリティ機能を使用可能にするには、DB2 のインストール時に、「DB2 オブジェクトのためにオペレーティング・システム・セキュリティを使用可能にする」パネルで、「オペレーティング・システム・セキュリティを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。「DB2 管理者グループ」フィールドと「DB2 ユーザー・グループ」フィールドで、デフォルト値を受け入れます。デフォルトのグループ名は DB2ADMNS と DB2USERS です。既存のグループ名と競合する場合は、グループ名を変更するようプロンプトで指示されます。必要な場合は、独自の名前を指定できます。

DB2 サーバー・ユーザー・アカウント:

インストール・ユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、インストールを実行するために必要です。ユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシンの管理者グループに属していなければなりません。

ドメイン・アカウントの場合、DB2 サーバー上のユーザー ID を検査するには、インストール・ユーザー ID が、アカウントを作成するドメイン上のドメイン管理者グループに属していなければなりません。

標準装備のローカル・システム・アカウントを使用して、DB2 UDB Enterprise Server Edition 以外のすべての製品のインストールを実行することもできます。

DB2 Administration Server (DAS) のユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、DB2 Administration Server (DAS) に必要です。

応答ファイルのインストールを実行している場合、応答ファイル内のローカル・システム・アカウントを指定することもできます。詳細については、db2¥windows¥samples ディレクトリー中のサンプル応答ファイルを参照してください。

DB2 Administration Server (DAS) は、GUI ツールをサポートするために使用される特殊 DB2 管理サービスで、ローカルおよびリモート DB2 サーバー上の管理作業を援助します。DAS にはユーザー・アカウントが割り振られており、それは、DAS サービスの開始時のコンピューターへの DAS サービスのログオンに使われます。

DAS ユーザー・アカウントは、DB2 をインストールする前に作成することもできますし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザー・アカウントを作成させたい場合には、インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントが、ドメイン・ユーザー・アカウントを作成する権限を持っている必要があります。ユーザー・アカウントは、インストールを実行する

マシンの管理者グループに属していなければなりません。このアカウントは、以下のユーザー権限を付与されます。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- プログラムのデバッグ
- トークン・オブジェクトの作成
- メモリー内のページのロック
- サービスとしてログオン
- クォータの増加
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

メモリー内のページのロック特権は、AWE (高機能ウィンドウ操作拡張) サポートの場合に必要です。「プログラムのデバッグ」特権は、DB2 グループ検索でアクセス・トークンを使用することが明示的に指定されている場合のみ必要です。

ユーザー・アカウントがインストール・プログラムによって作成される場合は、そのユーザー・アカウントにこれらの特権が付与されます。また、ユーザー・アカウントが既存の場合は、このアカウントにもこれらの特権が付与されます。インストール時に特権が付与される場合、これらの特権の一部は、これらの特権が付与されたアカウントによる最初のログオン時かリブート時にのみ有効になります。

ご使用の環境内のそれぞれの DB2 システム上の DAS ユーザーに、SYSADM 権限を与えることをお勧めします。そうすれば、必要であれば、それが他のインスタンスを開始したり停止したりすることができます。デフォルトでは、管理者グループに参加しているユーザーには SYSADM 権限があります。

DB2 インスタンス・ユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、DB2 インスタンスに必要です。どの DB2 インスタンスにも、インスタンスの作成時に割り振られる 1 つのユーザーがあります。インスタンスの開始時に、DB2 はこのユーザー名でログオンします。

標準装備のローカル・システム・アカウントを使用して、DB2 UDB Enterprise Server Edition 以外のすべての製品のインストールを実行することもできます。

DB2 インスタンス・ユーザー・アカウントは、DB2 をインストールする前に作成することもできますし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザー・アカウントを作成させたい場合には、インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントが、ドメイン・ユーザー・アカウントを作成する権限を持っている必要があります。ユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシンの管理者グループに属していなければなりません。このアカウントは、以下のユーザー権限を付与されます。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- プログラムのデバッグ
- トークン・オブジェクトの作成
- クォータの増加

- メモリー内のページのロック
- サービスとしてログオン
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

メモリー内のページのロック特権は、AWE (高機能ウィンドウ操作拡張) サポートの場合に必要です。「プログラムのデバッグ」特権は、DB2 グループ検索でアクセス・トークンを使用することが明示的に指定されている場合のみ必要です。

ユーザー・アカウントがインストール・プログラムによって作成される場合は、そのユーザー・アカウントにこれらの特権が付与されます。また、ユーザー・アカウントが既存の場合は、このアカウントにもこれらの特権が付与されます。インストール時に特権が付与される場合、これらの特権の一部は、これらの特権が付与されたアカウントによる最初のログオン時かりブート時にのみ有効になります。

DB2 の Windows 2000 へのインストール時のディレクトリーの選択

DB2 は、すべてのユーザーが書き込みアクセス権限を持っているディレクトリーにインストールする必要があります。DB2 が、限られたユーザー (管理者など) のみが書き込みアクセス権限を持つディレクトリーにインストールされた場合、通常ユーザーは DB2 コマンド行プロセッサを使用しようとしたときに、SQL1035N エラーを受け取る可能性があります。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ユーザー、ユーザー ID、およびグループの命名規則』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『単一パーティションのインストール (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『パーティション・インストール (Windows)』

インストール要件

DB2 Personal Edition のインストール要件 (Windows)

DB2 Personal Edition をインストールするには、以下のオペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の要件を満たす必要があります。

オペレーティング・システムの要件

以下のいずれかです。

- Windows ME
- Service Pack 6a またはそれ以降を装備した Windows NT バージョン 4
- Windows 2000
- Windows XP (32 ビットまたは 64 ビット)
- Windows Server 2003 (32 ビットまたは 64 ビット)

Windows XP (64 ビット) および Windows Server 2003 (64 ビット) サポート:

- ローカル 32 ビット・アプリケーション
- 32 ビット UDF およびストアード・プロシージャ

ハードウェア要件

Intel および AMD システムで実行する DB2 製品の場合、 Pentium または Athlon の CPU が必要です。

ソフトウェア要件

- MDAC 2.7 が必要です。 DB2 セットアップ・ウィザードは、 MDAC 2.7 がまだインストールされていない場合はインストールします。
- MDAC 2.7 が必要です。 DB2 セットアップ・ウィザードは、 MDAC 2.7 がまだインストールされていない場合はインストールします。
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要になります。インストールしようとしているコンポーネントの一部に SDK が必要な場合に、 SDK がまだインストールされていない場合は、 DB2 セットアップ・ウィザードか応答ファイルを使用して製品をインストールする際に SDK がインストールされます。 DB2 Run-time Client のインストール時に SDK もインストールされることはありません。 SDK の要件は以下のとおりです。
 - Windows 32 ビット: SDK 1.3.1 または SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
 - Windows 64 ビット: SDK 1.4.1 サービス・リリース 1最新の SDK 情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。
- オンライン・ヘルプを見るには、ブラウザーが必要です。

通信要件

- リモート・データベースに接続するのに、TCP/IP、NETBIOS、および NPIPE を使用できます。バージョン 8 の DB2 データベースをリモート側で管理するには、TCP/IP を使用して接続する必要があります。
- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) を使用する場合、Microsoft LDAP Client または IBM SecureWay LDAP Client V3.2.1 以降のいずれかが必要になります。
- 64 ビット・クライアントから下位レベルの 32 ビット・サーバーへの接続はサポートされません。
- 下位レベルの 32 ビット・クライアントから 64 ビット・サーバーへの接続では、SQL 要求のみがサポートされます。
- DB2 バージョン 6 およびバージョン 7 の 32 ビット・クライアントから DB2 バージョン 8 の Windows 64 ビット・サーバーへの接続では、SQL 要求のみがサポートされます。バージョン 7 の 64 ビット・クライアントからの接続はサポートされません。

関連タスク:

- 21 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的にサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になります。

必須のソフトウェア、通信製品、およびドキュメンテーションのために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 UDB は 256 MB 以上の RAM を必要とします。GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。
- システム上で実行される他のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要です。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって変化します。
- メモリー要件は、データベース・アクティビティの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数によって変化します。
- Linux では、最低でも RAM の 2 倍の SWAP スペースが推奨されています (要求されているわけではありません)。

ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)

Windows 2000 または Windows Server 2003 で Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用する予定の場合、ディレクトリー・スキーマを拡張して、

DB2 オブジェクト・クラスおよび属性定義を組み込まなければなりません。この作業は、DB2 製品をインストール前に行う必要があります。

前提条件:

Windows ユーザー・アカウントは、スキーマ管理権限をもっていなければなりません。

手順:

ディレクトリー・スキーマを拡張するには、以下の手順に従います。

1. ドメイン・コントローラーとしてログオンします。
2. スキーマ管理権限で、インストール CD から **db2schex.exe** プログラムを実行します。このプログラムは、以下のようにスキーマ管理権限を使用して、ログオフおよび再度ログオンをすることなく実行できます。

```
runas /user:MyDomain\Administrator x:%db2%\Windows\utilities\db2schex.exe
```

ここで、x: は CD-ROM の文字です。

db2schex.exe が完了したら、DB2 製品のインストールに進むことができます。

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)』

DB2 Personal Edition の DB2 セットアップ・ウィザードの開始 (Windows)

このタスクでは、Windows 上で DB2 セットアップ・ウィザードを開始する方法を説明します。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストール内容を定義し、システムに DB2 をインストールします。

前提条件:

DB2 セットアップ・ウィザードを開始する前に以下を行ってください。

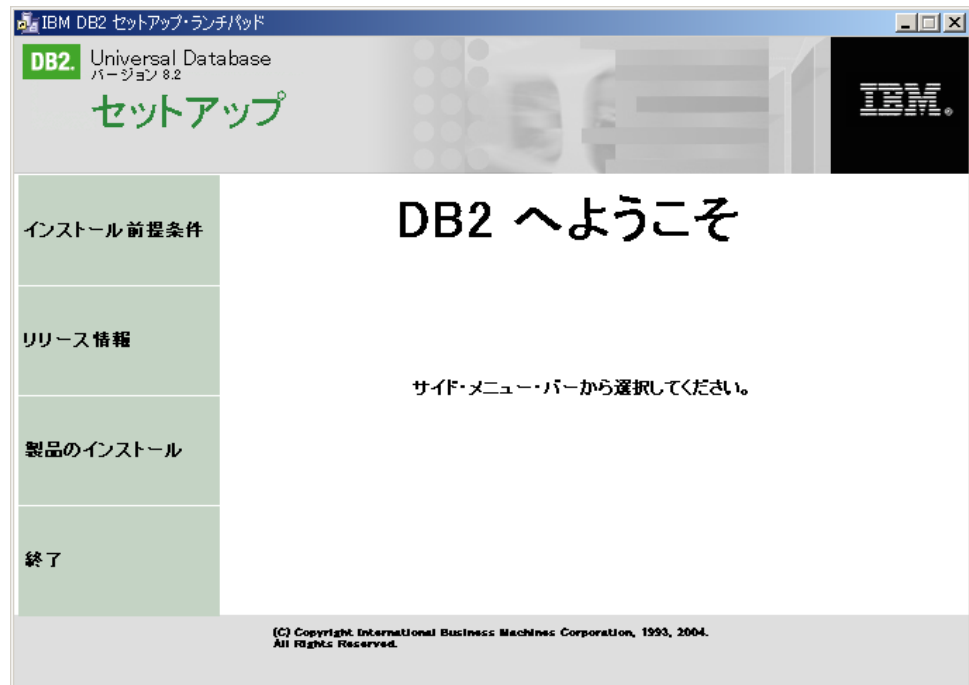
- インストール、メモリー、およびディスクの要件をシステムが満たしていることを確認します。
- Windows 2000 または Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット) 上で LDAP を使用する予定の場合、インストール前にディレクトリー・スキーマを拡張する必要があります。
- インストールを実行するには、ローカル管理特権を有するアカウントをもち、推奨どおりのユーザー権限を持っている必要があります。

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを開始するには、次のようにします。

1. DB2 のインストール用に定義した管理者アカウントを使用して、システムにログオンします。

- すべてのプログラムをシャットダウンし、インストール・プログラムが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
- CD-ROM をドライブに挿入します。使用可能な場合は、自動実行機能により DB2 セットアップ・ランチパッドが自動的に開始されます。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース情報を表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。インストール前提条件およびリリース情報を見直して、最近明らかになった情報を知ることができます。「製品のインストール」を選択してから、インストールする DB2 製品を選択します。

- DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを別の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動に失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して手動で開始することができます。DB2 セットアップ・ウィザードを開始するための構文は、この手順の末尾に説明されています。
- インストールを開始したら、セットアップ・プログラムの指示に従って進めてゆきます。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、F1 を押します。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。DB2 セットアップ・ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了」をクリックしてはじめて DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、'My Documents'\DB2LOG¥ ディレクトリーにある db2.log および db2wi.log ファイルを参照してください。My Documents ディレクトリーのロケーションは、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルは、最新の DB2 インストール情報をキャプチャーします。
db2.log は DB2 のインストールの履歴をキャプチャーします。

/I スイッチを使用して、ログ・ファイルのパスを指定できます。

次のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

1. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」オプションを選択します。
2. 「開く」フィールドで、次のコマンドを入力します。

```
x:%setup /i language
```

ここで、

- *x:* は使用する CD-ROM ドライブを表します。
- *language* は使用言語のテリトリ ID です (たとえば、英語の場合は EN になります)。

/i language パラメーターはオプションです。これを指定しない場合には、DB2 セットアップ・ウィザードは、オペレーティング・システムと同じ言語で稼働します。

3. 「OK」をクリックします。

ローカル・コンピューターか、ネットワーク上の別のコンピューターにある DB2 資料に DB2 製品からアクセスできるようにする場合は、DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database と DB2 関連製品の資料が収録されています。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 86 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 29 ページの『ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)』
- 91 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 Personal Edition のインストールとセットアップ用のユーザー・アカウント』
- 27 ページの『DB2 Personal Edition のインストール要件 (Windows)』
- 「コマンド・リファレンス」の『setup - Install DB2 コマンド』

第 5 章 DB2 Personal Edition のインストール (Linux)

インストールの概要

DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)

このトピックでは、Linux に DB2 Personal Edition をインストールするためのステップの概要を述べます。

手順:

DB2 Personal Edition を Linux にインストールするには、以下のステップを実行します。

1. DB2 Personal Edition の前提条件を調べます。ご使用のコンピューターが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ディスクとメモリー、およびインストール要件。
 - DB2 Personal Edition のインストールとセットアップ用のユーザー・アカウント。インストールには 1 つ、セットアップには 2 つのユーザー・アカウントが必要です。セットアップに必要なユーザー・アカウントは、インストール前に作成することもできますし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。
2. DB2 インストール CD-ROM のマウントを行います。
3. DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Personal Edition のインストールを行います。DB2 セットアップ・ウィザードの機能は以下で構成されます。
 - インストールの注意書きやリリース情報と、DB2 バージョン 8 の機能の解説を表示するのに使用できる DB2 セットアップ・ランチパッド。
 - 標準、コンパクト、およびカスタムのインストール・タイプ。表示されるインストール選択項目は、選択するインストール・タイプによって異なります。
 - 複数言語のインストール・サポート。
 - DB2 Administration Server のセットアップ (DAS ユーザーのセットアップを含む)。
 - 管理連絡窓口とヘルス・モニターの通知のセットアップ。
 - インスタンスのセットアップと構成 (インスタンス・ユーザーのセットアップを含む)。
 - DB2 ツール・カタログおよびウェアハウス・コントロール・データベースのセットアップ。
 - 応答ファイルの作成。ご使用のインストール選択項目を応答ファイル中に保管しておき、後でインストールに使用したり、別のコンピューター上にインストールを複製したりすることができます。
4. オプション: DB2 インフォメーション・センターをインストールします。

関連概念:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB のインストール方式 (Windows および UNIX)』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 38 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードの開始 (Linux)』
- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 製品の手動インストール』
- 88 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 36 ページの『DB2 Personal Edition のインストール要件 (Linux)』
- 「リリース情報」の『アジア言語フォントの使用の可能性 (Linux)』

NIS インストールの注意点

NIS または NIS+ といったセキュリティー・ソフトウェアが組み込まれた環境では、インストールの注意点がいくつかあります。DB2 インストール・スクリプトは、ユーザーやグループといった、セキュリティー・パッケージの制御下にあるオブジェクトを更新しようとしても、NIS または NIS+ がインストールされている場合はできません。

インスタンスの作成時に、セキュリティー・コンポーネントが存在しないと、インスタンス所有ユーザーのグループ・プロパティが自動的に変更されて、Administration Server のグループにセカンダリー・グループとして追加されます。そして、Administration Server のグループ・プロパティがインスタンス所有者のグループを組み込むように変更されます。インスタンス作成プログラムがこれらのプロパティの変更を行うことができない場合には (NIS/NIS+ がグループを制御している場合には行えない)、できなかったことを報告します。警告メッセージで、手動で変更を行うのに必要な情報を提供します。

外部セキュリティー・プログラムのために、DB2 インストールまたはインスタンス作成プログラムがユーザー特性を変更できない環境では、これらのことに注意する必要があります。

DB2 セットアップ・ウィザードがご使用のコンピューターで NIS を検出した場合、インストール中に新規ユーザーを作成するオプションを提供されません。その代わりに既存のユーザーを選択しなければなりません。

NIS または NIS+ を使用している場合には、次の制約事項を考慮してください。

- DB2 セットアップ・ウィザードを実行する前に、NIS サーバー上でグループおよびユーザーを作成する必要があります。
- NIS サーバー上で、DB2 インスタンス所有者や DB2 Administration Server 用にセカンダリー・グループを作成する必要があります。その後、インスタンス所有者のプライマリー・グループを、セカンダリー DB2 Administration Server グループへ追加しなければなりません。同様に、プライマリー DB2 Administration Server グループについても、インスタンス所有者のセカンダリー・グループへ追加しなければなりません。

- DB2 ESE システムでは、インスタンスを作成する前に、`etc/services` ファイル内にインスタンスの項目を入れておく必要があります。たとえば、ユーザー `db2inst1` のインスタンスを作成する場合、次のような項目が必要です。

```
DB2_db2inst1    50000/tcp
```

関連タスク:

- 33 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』
- 36 ページの『DB2 Personal Edition の必須のグループとユーザーの手動作成 (Linux)』

デスクトップ・アイコンの変更 (Linux)

DB2 には、DB2 デスクトップ・フォルダーとアイコンの作成のための一連のユーティリティが用意されています。なお、サポートされている Intel ベースの Linux ディストリビューション用の Gnome および KDE デスクトップ上で最もよく使われる DB2 ツールを立ち上げるのに、そのようなフォルダーとアイコンを使います。これらのユーティリティはデフォルトでインストールされますが、インストール後に、選択した 1 つ以上のユーザー用のデスクトップ・アイコンの作成と除去に使用することができます。

前提条件:

他のユーザー用のアイコンの生成または除去のための十分な権限をもっている必要があります。一般的に通常ユーザーの場合は、`db2icons` と `db2rmicons` を使用して自身のアイコンを作成または除去することができますが、`root` であるか、または指定ユーザーのホーム・ディレクトリーへの書き込み権限をもつユーザーでなければ、他のユーザーのアイコンを作成または除去することはできません。

制約事項:

Gnome または KDE デスクトップ環境の実行中にアイコンを生成した場合に、新規のアイコンを表示するには、手動でデスクトップを強制的にリフレッシュする必要があります。

手順:

1 人以上のユーザー用の一連のデスクトップ・アイコンを追加するには、次のようなコマンドを入力します。

```
db2icons <user1> [<user2> <user3>...]
```

1 人以上のユーザー用の一連のデスクトップ・アイコンを除去するには、次のようなコマンドを入力します。

```
db2rmicons <user1> [<user2> <user3>...]
```

DB2 グループおよびユーザー

DB2 Personal Edition の必須のグループとユーザーの手動作成 (Linux)

DB2 の操作には、3 つのユーザーおよびグループが必要です。この後の解説で使用しているユーザーおよびグループの名前を下の表に示してあります。各自のシステムの命名規則と DB2 の命名規則に準拠しているかぎり、独自のユーザー名とグループ名を指定してもかまいません。

表 1. 必須のユーザーおよびグループ

必須ユーザー	ユーザー名	グループ名
インスタンス所有者	db2inst1	db2iadm1
fenced ユーザー	db2fenc1	db2fadm1
Administration Server ユーザー	db2as	db2asgrp

前提条件:

ユーザーおよびグループを作成するには root 権限が必要です。

手順:

Linux 上でグループを作成するには、次のようなコマンドを入力します。

```
mkgroup -g 999 db2iadm1
mkgroup -g 998 db2fadm1
mkgroup -g 997 db2asgrp
```

各グループごとに次のようにユーザーを作成します。

```
mkuser -u 1004 -g db2iadm1 -G db2iadm1 -m -d /home/db2inst1
db2inst1 -p mypasswd

mkuser -u 1003 -g db2fadm1 -G dbfadm1 -m -d /home/db2fenc1
db2fenc1 -p mypasswd

mkuser -u 1002 -g db2asgrp -G db2asgrp -m -d /home/db2as
db2as -p mypasswd
```

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ユーザー、ユーザー ID、およびグループの命名規則』

関連タスク:

- 33 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』

インストール要件

DB2 Personal Edition のインストール要件 (Linux)

DB2 Personal Edition をインストールするには、以下のハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の要件を満たす必要があります。

ハードウェア要件

Intel の 32 ビットおよび 64 ビットのアーキテクチャーがサポートされます。

分散要件

サポートされている配布レベルおよびカーネル・レベルの最新情報については、ブラウザで <http://www.ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、該当する SDK が必要になります。インストールしようとしているコンポーネントの一部に SDK が必要な場合に、SDK がまだインストールされていない場合は、DB2 セットアップ・ウィザードか応答ファイルを使用して製品をインストールする際に SDK がインストールされます。DB2 Run-time Client のインストール時に SDK もインストールされることはありません。SDK の要件は以下のとおりです。

- Linux 32 ビット: SDK 1.3.1 または SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
- Linux Red Hat EL 3 32 ビット: SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
- Linux IPF 64 ビット: SDK 1.3.1
- LinuxAMD 64 ビット: SDK 1.3.1

最新の SDK 情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- オンライン・ヘルプを見るには、ブラウザが必要です。

通信要件

リモート・データベースへのアクセスには TCP/IP が必要です。

関連タスク:

- 33 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的にサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になります。

必須のソフトウェア、通信製品、およびドキュメンテーションのために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 UDB は 256 MB 以上の RAM を必要とします。GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。
- システム上で実行される他のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要です。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって変化します。
- メモリー要件は、データベース・アクティビティーの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数によって変化します。
- Linux では、SWAP スペースが RAM の 2 倍以上であることを確認してください。

DB2 セットアップ・ウィザードの開始 (Linux)

このタスクでは、Linux 上で DB2 セットアップ・ウィザードを開始する方法を説明します。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、システム上でインストール設定値を定義し、DB2 をインストールします。

前提条件:

DB2 セットアップ・ウィザードを開始する前に以下を行ってください。

- インストール、メモリー、およびディスクの要件をシステムが満たしていることを確認します。
- インストールを実行するために、root 権限が必要です。
- DB2 製品の CD-ROM が、ご使用のシステムにマウントされていなければなりません。
- DB2 セットアップ・ウィザードは Java ベースのインストーラーです。これをマシン上で実行するには、グラフィカル・ユーザー・インターフェースをレンダリングする機能を備えた、XWindow ソフトウェアを実行している必要があります。

- NIS/NIS+ またはその類似のセキュリティー・ソフトウェアを使用している環境の場合、DB2 セットアップ・ウィザードを開始する前に、必要な DB2 ユーザーを手動で作成する必要があります。これを行う場合、記載されている NIS のトピックを事前に参照してください。
- **db2set** コマンドを発行して、ランタイムに非同期入出力 (AIO) を使用可能したり使用不可にしたりできます。AIO を使用するには、libaio 0.3.96 以降をインストールし、AIO をサポートするカーネル (バージョン 2.6 など) を用意し、**db2set DB2NOLIOAIO=false** コマンドを実行して、DB2 を再始動しなければなりません。

手順:

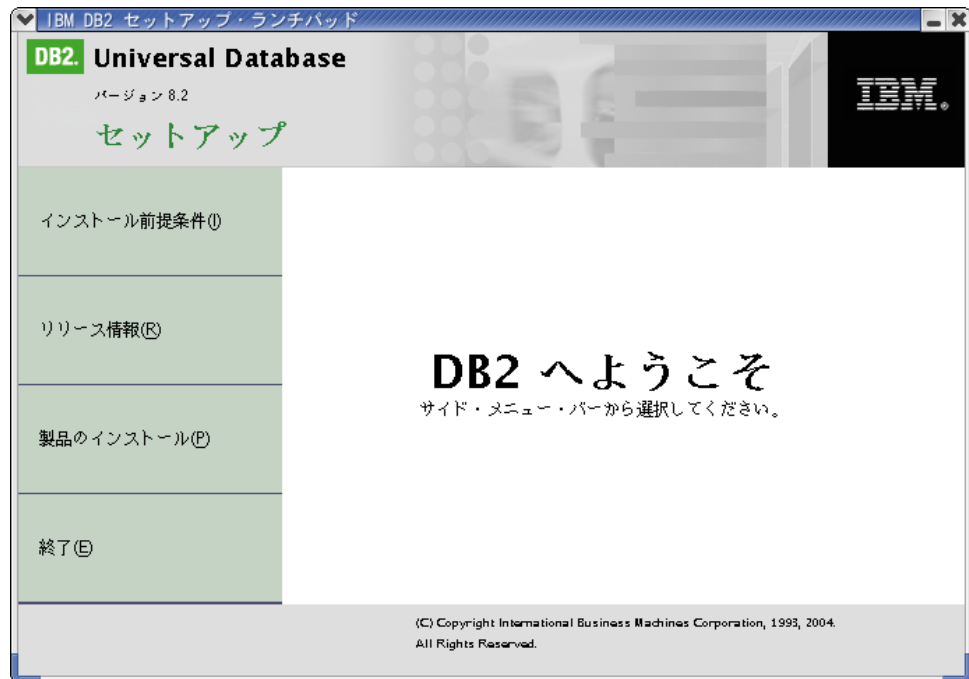
DB2 Personal Edition を Linux にインストールするには、以下のステップを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
2. 次のコマンドを入力することによって、CD-ROM がマウントされているディレクトリに移動します。

```
cd /media/cdrom
```

ただし、/media/cdrom は CD-ROM のマウント・ポイントを表します。

3. **./db2setup** コマンドを入力して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。数分後に、IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが開きます。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース情報を表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。インストール前提条件およびリリース情報を見直して、最近明らかになった情報を知ることができます。

インストールを開始したなら、DB2 セットアップ・ウィザードのインストール・パネルに従って、選択を行ってください。DB2 セットアップ・ウィザード

では、インストール操作のヘルプを利用できます。「ヘルプ (Help)」をクリックするか、F1 を押して、インストール操作のヘルプを呼び出します。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。DB2 セットアップ・ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了」をクリックしてはじめて DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストールが完了すると DB2 Personal Edition は、 /opt/IBM/db2/V8.1 にインストールされています。

ローカル・コンピューターか、ネットワーク上の別のコンピューターにある DB2 資料に DB2 製品からアクセスできるようにする場合は、DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database と DB2 関連製品の資料が収録されています。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 86 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

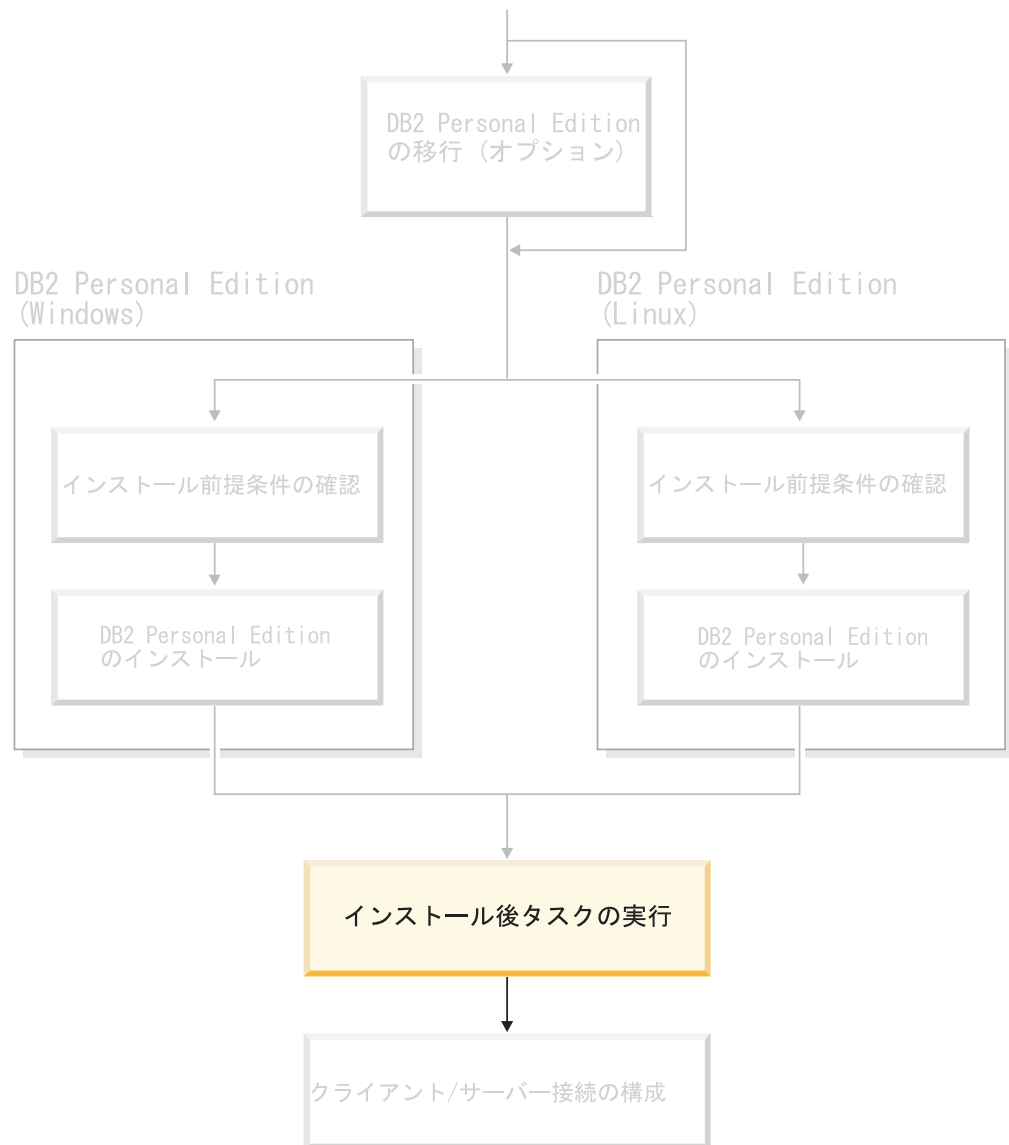
関連タスク:

- 36 ページの『DB2 Personal Edition の必須のグループとユーザーの手動作成 (Linux)』
- 88 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 34 ページの『NIS インストールの注意点』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2setup - DB2 のインストール・コマンド』

第 4 部 インストール後のタスク



第 6 章 DB2 フィックスパックのインストール

最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)

DB2 フィックスパックは、IBM でのテストの際に検出された問題に対するフィックス (プログラム診断依頼書 (APAR)) と、顧客から報告された問題のフィックスから成ります。どのフィックスパックにも、フィックスの内容を説明した APARLIST.TXT という表題の資料が添付されています。

フィックスパックは累積されます。その意味は、ある任意のバージョンの DB2 の最新のフィックスパックには、同じバージョンの DB2 のそれまでのフィックスパックを更新した内容がすべて入っているということです。DB2 の実行環境を最新のフィックスパック・レベルに保って、操作で問題が生じないようにすることをお勧めします。

区画に分割された ESE システムにフィックスパックをインストールする場合は、まずシステムがオフラインの状態ですべての参加コンピューターにフィックスパックをインストールし、それからシステムをオンラインにする必要があります。

前提条件:

各フィックスパックにはそれぞれ固有の前提条件があります。詳細は、フィックスパックに付属している FixPak Readme を参照してください。

制約事項:

DB2 Universal Database をインストールして Common Criteria で認証された構成をセットアップする場合には、フィックスパックはインストールしないでください。フィックスパックは Common Criteria に応じた評価をしていないので、フィックスパックをインストールすると、構成が準拠しなくなります。

手順:

1. 最新の DB2 フィックスパックは、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support> にある「IBM DB2 UDB and DB2 Connect」オンライン・サポートからダウンロードしてください。各フィックスパックには、リリース情報と Readme が入っています。Readme には、フィックスパックのインストール方法の解説が述べられています。
2. フィックスパックをインストールします。
3. UNIX システム上で **db2iupdt** コマンドを実行して、インスタンスを更新してください。

関連概念:

- 113 ページの『DB2 Universal Database 製品の共通基準認証』

関連タスク:

- 45 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査』

第 7 章 DB2 サーバーのインストールの検査

コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査

サンプル・データベースを作成してから SQL コマンドを実行してサンプル・データを取り出すことで、インストール内容を検査することができます。

前提条件:

- サンプル・データベース・コンポーネントが、システムにインストールされていなければならない、標準インストールに含まれています。
- この場合、SYSADM 権限をもったユーザーが必要です。

手順:

インストール内容を検査するには、以下のステップを実行します。

1. SYSADM 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
2. **db2start** コマンドを入力して、データベース・マネージャーを開始します。
3. **db2sampl** コマンドを入力して、SAMPLE データベースを作成します。

このコマンドは、処理に数分かかることがあります。コマンド完了時のメッセージはありません。コマンド・プロンプトに戻った時点で、この処理は完了しています。

SAMPLE データベースが作成されると、自動的にデータベース別名 SAMPLE としてカタログされます。

4. DB2 コマンド・ウィンドウで次の DB2 コマンドを入力して SAMPLE データベースに接続し、部門 20 で働いているすべての従業員のリストを検索してから、データベース接続をリセットします。

```
db2 connect to sample
db2 "select * from staff where dept = 20"
db2 connect reset
```

インストールを検査し終わったら、SAMPLE データベースを除去してディスク・スペースを解放することができます。SAMPLE データベースをドロップするには、**db2 drop database sample** コマンドを入力します。

関連タスク:

- 45 ページの『ファースト・ステップを使用した DB2 サーバーのインストールの検査』

ファースト・ステップを使用した DB2 サーバーのインストールの検査

SAMPLE データベースからのデータにアクセスすることによって、DB2 サーバーのインストールが正常に完了したかを検査する必要があります。

前提条件:

- このタスクを実行するために、コントロール・センターおよびファースト・ステップをインストールしておく必要があります。ファースト・ステップは、DB2 セットアップ・ウィザードにグループ化されている、入門コンポーネントのパーツです。これは、標準インストールでは、そのパーツとしてインストールされますし、カスタム・インストールでは、その実行時に選択することができます。
- このタスクを実行するには、SYSADM または SYSCTRL 権限を持っている必要があります。

手順:

1. インストールを検査するために使うユーザー・アカウントで、システムにログオンします。サンプル・データベースを作成するときに使うドメイン・ユーザー・アカウントに、SYSADM または SYSCTRL 権限があることを確認します。
2. ファースト・ステップを開始します。
 - UNIX では、**db2fs** と入力します。
 - Windows では、**db2fs.bat** と入力します。
3. ファースト・ステップ・ランチパッドで「**サンプル・データベースの作成**」を選択し、「サンプル・データベースの作成」ウィンドウをオープンします。
4. 「サンプル・データベースの作成」ウィンドウで、以下から作成するデータベースを選択します。

インストールを検査するときには、DB2 UDB サンプル・データベースを使いません。データウェアハウス・サンプル・データベースは、ビジネス・インテリジェンス・チュートリアルで使用します。

注: データウェアハウス・サンプル・データベースは、基本ウェアハウス・コンポーネントをインストールした場合にのみ適用されます。

5. 「**OK**」をクリックします。

デフォルトでは、SAMPLE データベースは、DB2 がインストールされたドライブに作成されます。

このコマンドは、処理に数分かかることがあります。SAMPLE データベースの作成が完了したら、完了メッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。

6. データベースを作成したら、ファースト・ステップ・ランチパッドで「**データベースの処理**」を選択し、コントロール・センターを始動します。コントロール・センターを使用すると、異なるインスタンスおよびデータベース・オブジェクトで、管理作業を実行することができます。

「コントロール・センター (Control Center)」画面の左側のペインで、オブジェクト・ツリーを展開し、SAMPLE データベースおよび SAMPLE データベース・オブジェクトが見えるようにします。「表 (Tables)」オブジェクトを選択し、「コントロール・センター (Control Center)」画面の右側のペインに、SAMPLE データベース表が表示されるようにします。

インストールを検査し終わったら、SAMPLE データベースを除去してディスク・スペースを解放することができます。SAMPLE データベースをドロップするには、**db2 drop database sample** コマンドを入力します。

関連タスク:

- 45 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査』
- 21 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Windows)』
- 33 ページの『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2fs - 最初のステップ』

第 8 章 DB2ADMNS および DB2USERS ユーザー・グループへのユーザー ID の追加

DB2 のインストールが正常に完了したら、ユーザーを DB2ADMNS または DB2USERS グループに追加して、それらのユーザーが DB2 にアクセスできるようにする必要があります。DB2 インストーラーは 2 つの新しいグループを作成します。新しい名前を使用するか、デフォルト名を受け入れることができます。デフォルトのグループ名は DB2ADMNS と DB2USERS です。

前提条件:

- DB2 のインストールが完了している必要があります。
- DB2 のインストール時に、DB2 のオブジェクトに関するオペレーティング・システムのセキュリティーを有効にするパネルで、オペレーティング・システムのセキュリティーを有効にするチェック・ボックスを選択している必要があります。

手順:

ユーザーを適切なグループに追加するには、以下の手順に従います。

1. 「ユーザーおよびパスワード管理 (Users and Passwords Manager)」ツールを起動します。
2. 追加するユーザー名をリストから選択します。
3. 「プロパティ (Properties)」をクリックします。「プロパティ (Properties)」ウィンドウで、「グループ・メンバーシップ (Group Membership)」タブをクリックします。
4. 「その他 (Other)」ラジオ・ボタンを選択します。
5. ドロップダウン・リストから適切なグループを選択します。

インストール時に新しいセキュリティー機能を有効にしない設定を選択した場合でも、インストール後に **db2secv82.exe** コマンドを実行することによって有効にすることができます。

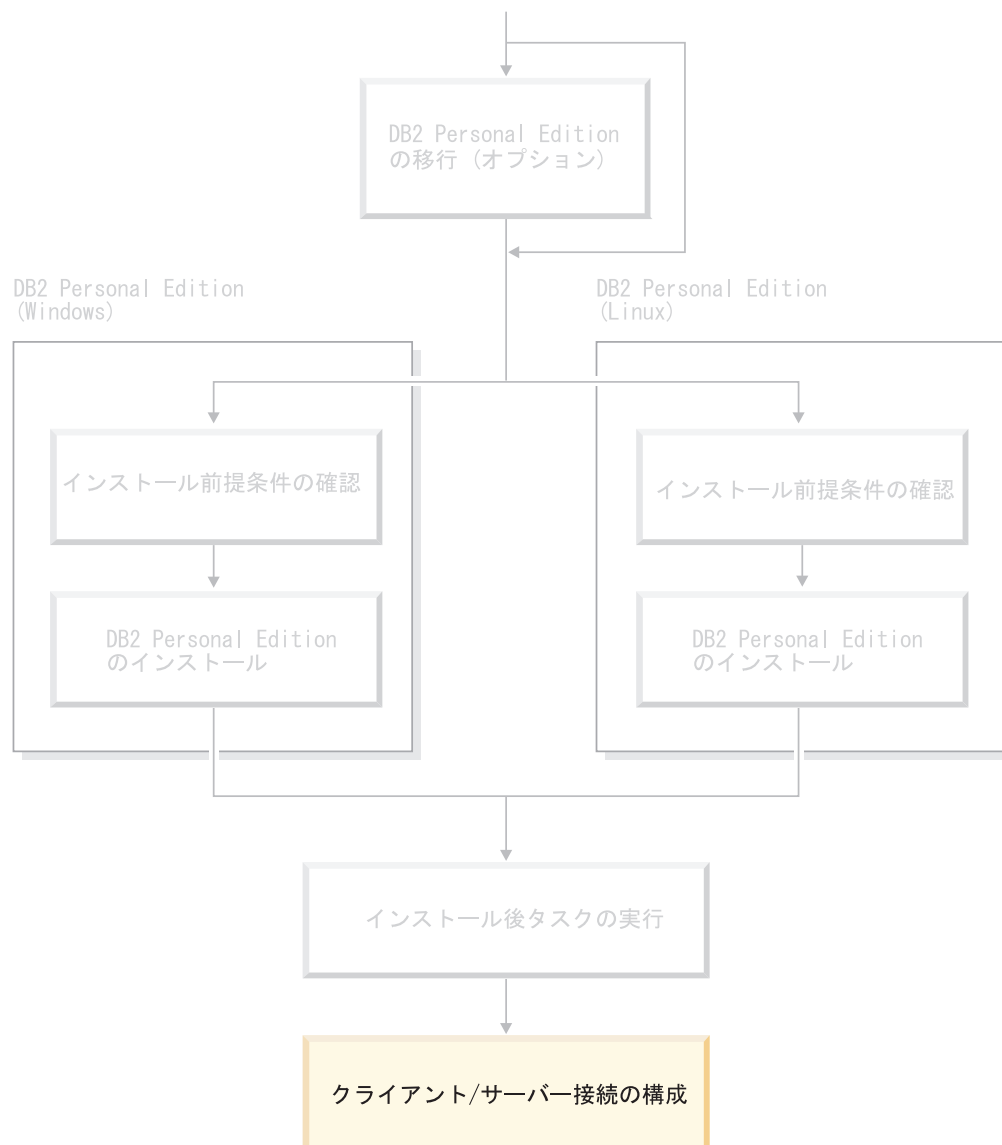
db2secv82.exe コマンドを使用してこのセキュリティー機能を有効にした後、この設定を元に戻すには以下の 2 つの方法があります。

1. システムに変更を加えないうちに、**db2secv82.exe** コマンドをすぐに再実行します。システムに何かの変更を加えた場合は、2 番目の方法を使用してください。
2. Everyone グループを DB2ADMNS および DB2USERS グループに追加します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2secv82 - Set permissions for DB2 objects コマンド』

第 5 部 クライアント/サーバー接続の構成



第 9 章 構成アシスタントを使用した接続の構成

構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成

このトピックでは、構成アシスタント (CA) を使用して、ご使用の DB2 クライアントをリモート・データベースに接続する方法を説明します。構成アシスタントは、データベース接続および他のデータベース設定を構成するために使用できる、DB2 GUI ツールです。構成アシスタント (CA) は、DB2 の前のリリースでは、クライアント構成アシスタント (CCA) と呼ばれていました。

コマンド行プロセッサ (CLP) を使用してクライアントからサーバーへの接続を構成することもできます。

CA を、ご使用の DB2 クライアントにインストールする必要があります。CA は DB2 Administration Client および DB2 Application Development Client のパーツとして使用可能です。

リモート・サーバーはインバウンド・クライアントの要求を受け入れるように構成する必要があります。デフォルトでは、サーバー・インストール・プログラムは、インバウンド・クライアント接続のためにサーバー上のほとんどのプロトコルを検出し、そして構成します。

次のいずれか 1 つのメソッドを使用して、データベースへの接続を構成できます。

- ディスカバリーを使用したデータベースへの接続
- プロファイルを使用したデータベースへの接続
- CA を使用した手動によるデータベースへの接続

どのメソッドを使用する必要があるか:

ディスカバリーを使用したデータベースへの接続

接続したいデータベースに関する情報がない場合は、このメソッドを使用してください。このメソッドは、ネットワークを検索し、使用可能なデータベースをすべてリストします。CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、サーバー上で DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

プロファイルを使用したデータベースへの接続

ターゲット・データベースにアクセスするのに必要な情報をすべて含むファイルがある場合は、このメソッドを使用してください。アクセス・プロファイル・ファイル中に指定されている複数のデータベースをカタログして接続する場合にも、このメソッドを使用できます。

手動によるデータベースへの接続

ターゲット・データベースに接続するのに必要な情報をすべて知っている場合は、このメソッドを使用してください。以下の情報を知っている必要があります。

- ターゲット・データベースのあるサーバーでサポートされている通信プロトコル
- サーバーのプロトコルにとって適切な通信パラメーター
- データベースの名前

関連タスク:

- 58 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』
- 57 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』
- 56 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 63 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成』

データベース接続の構成

Windows および Linux 上での構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の構成

接続したいデータベースと、そのデータベースを置くサーバーに関する詳細が分かっている場合、すべての構成情報を手動で入力することができます。この方法は、コマンド行プロセッサを介してコマンドを入力するのと類似していますが、パラメーターがグラフィカルに提示されます。

前提条件:

CA を使用してデータベースへの接続を構成するには、事前に以下を行っておきます。

- 有効な DB2 ユーザー ID をもっていることを確認します。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品をインストールしたシステムにデータベースを追加する場合、このインスタンスに対する SYSADM または SYSCTRL 権限をもつユーザー ID をもっていることを確認します。

手順:

CA を使用してシステムにデータベースを手動で追加するには、以下のステップを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。以下のいずれかの方法で CA を開始することができます。
 - Windows システムの「スタート」メニューから開始します。
 - Linux システム上のアイコンから開始します。インスタンス所有者の環境からのみこのアイコンを使うことができます。それ以外の場合は、**db2icons** コマンドを使用して使用可能にする必要があります。
 - Windows システムと Linux システム上の **db2ca** コマンドから開始します。

3. CA メニュー・バーの「**選択済み (Selected)**」の下の「**ウィザードを使用したデータベースの追加 (Add a database using wizard)**」を選びます。
4. 「**データベースへの接続を手動で構成する (Manually configure a connection to a database)**」ラジオ・ボタンを選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。
5. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用している場合には、DB2 ディレクトリーを保持したいロケーションに対応するラジオ・ボタンを選択します。「**次へ (Next)**」をクリックします。

注: LDAP は Linux ではサポートされません。

6. 「**プロトコル (Protocol)**」リストから、使用したいプロトコルに対応するラジオ・ボタンを選択します。

ご使用のマシンに DB2 Connect がインストールされている場合に TCP/IP または APPC を選択すると、「**データベースはホストまたは OS/400 システムに物理的に常駐 (The database physically resides on a host or OS/400 system)**」を選択します。このチェック・ボックスを選択すると、ホストまたは OS/400 に確立したい接続のタイプを選択するオプションが表示されます。

- DB2 Connect ゲートウェイ経由の接続を確立するには、「**ゲートウェイ経由でサーバーに接続 (Connect to the server via the gateway)**」ラジオ・ボタンを選択します。
- 直接接続を確立するには、「**サーバーに直接接続 (Connect directly to the server)**」ラジオ・ボタンを選択します。

「**次へ (Next)**」をクリックします。

7. 必要な通信プロトコル・パラメーターを入力し、「**次へ (Next)**」をクリックします。
8. 追加したいリモート・データベースのデータベース別名を「**データベース名 (Database name)**」フィールドに入力し、ローカル・データベース別名を「**データベース別名 (Database alias)**」フィールドに入力します。

ホストまたは OS/400 データベースを追加する場合、OS/390 または z/OS データベースのロケーション名、OS/400 データベースの RDB 名、または VSE データベースまたは VM データベースの DBNAME を「**データベース名 (Database name)**」フィールドに入力します。さらにオプションとして、このデータベースについて記述する注釈を「**注釈 (Comment)**」フィールドに入力します。

「**次へ (Next)**」をクリックします。

9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていないとなりません。
10. 「**完了 (Finish)**」をクリックします。これで、このデータベースを使えるようになりました。「**終了 (Exit)**」メニュー・アクションを選んで、CA をクローズします。

手順の完了後、このタスクに関連したトピックを作成する必要があります。

関連タスク:

- 56 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動構成』
- 53 ページの『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』

構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動構成

接続したいデータベースと、そのデータベースを置くサーバーに関する詳細が分かっている場合、すべての構成情報を手動で入力することができます。この方法は、コマンド行プロセッサを使用してコマンドを入力するのと類似していますが、パラメーターがグラフィカルに提示されます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID をもっていることを確認します。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品をインストールしたシステムにデータベースを追加する場合、このインスタンスに対する SYSADM または SYSCTRL 権限をもつユーザー ID をもっていることを確認します。

手順:

CA を使用してシステムにデータベースを手動で追加するには、以下のステップを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「**選択済み (Selected)**」で、「**ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)**」を選択します。
4. 「**データベースへの接続を手動で構成する (Manually configure a connection to a database)**」ラジオ・ボタンを選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。
5. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用している場合には、DB2 ディレクトリーを保持したい場所に対応するラジオ・ボタンを選択します。「**次へ (Next)**」をクリックします。
6. 「**プロトコル (Protocol)**」リストから、使用したいプロトコルに対応するラジオ・ボタンを選択します。

使用しているシステムに DB2 Connect がインストールされており、TCP/IP または APPC を選択する場合には、「**データベースはホストまたは OS/400 システムに物理的に常駐 (The database physically resides on a host or OS/400 system)**」を選択できます。このチェック・ボックスを選択すると、ホストまたは OS/400 データベースに確立したい接続のタイプを選択するオプションが表示されます。

- DB2 Connect ゲートウェイ経由の接続を確立するには、「**ゲートウェイ経由でサーバーに接続 (Connect to the server via the gateway)**」ラジオ・ボタンを選択します。

- 直接接続を確立するには、「サーバーに直接接続 (Connect directly to the server)」ラジオ・ボタンを選択します。

「次へ (Next)」をクリックします。

7. 必要な通信プロトコル・パラメーターを入力し、「次へ (Next)」をクリックします。
8. 追加したいリモート・データベースのデータベース別名を「データベース名 (Database name)」フィールドに入力し、ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力します。

ホストまたは OS/400 データベースを追加する場合、OS/390 または z/OS データベースのロケーション名、OS/400 データベースの RDB 名、または VSE データベースまたは VM データベースの DBNAME を「データベース名 (Database name)」フィールドに入力します。さらにオプションとして、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力できます。

「次へ (Next)」をクリックします。

9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていないとなりません。
10. 「ノード・オプションの指定 (Specify the node options)」ウィンドウで、オペレーティング・システムを選択し、接続したいデータベース・システムのリモート・インスタンス名を入力します。
11. 「システム・オプションを指定する」ウィンドウで、システム名、ホスト名、およびオペレーティング・システムが正しいことを確認します。オプションで注釈を入力できます。「次へ (Next)」をクリックします。
12. 「セキュリティ・オプションを指定する」ウィンドウで、認証に使用するセキュリティ・オプションを指定します。
13. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。「終了 (Exit)」メニュー・アクションを選んで、CA をクローズします。

関連タスク:

- 58 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』
- 57 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

プロファイルによるデータベース接続の構成

サーバー・プロファイルには、システム上のサーバー・インスタンス、およびそれぞれのサーバー・インスタンスのデータベースについての情報が含まれています。クライアント・プロファイルには、別のクライアント・システム上にカタログが作成されているデータベース情報が含まれています。

サーバー・プロファイルを使用して 1 つのデータベースを構成するには、下記のようにします。複数のデータベースに対する接続を同時に構成したい場合は、構成アシスタント (CA) のインポート関数を使用する必要があります。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID をもっていることを確認します。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品をインストールしたシステムにデータベースを追加する場合、このインスタンスに対する SYSADM または SYSCtrl 権限をもつユーザー ID をもっていることを確認します。

手順:

プロファイルを使用してデータベース接続を構成するには、以下のステップを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「**選択済み (Selected)**」で、「**ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard)**」を選択します。
4. 「**プロファイルを使用する (Use a profile)**」ラジオ・ボタンを選択し、「**次へ (Next)**」をクリックします。
5. 「**...**」をクリックして、プロファイルを選択します。
6. 「**ロード**」をクリックして、プロファイル中のデータベースを選択します。
7. 「**次へ (Next)**」をクリックします。
8. ローカル・データベース別名を「**データベース別名 (Database alias)**」フィールドに入力し、オプションでこのデータベースについて記述する注釈を「**注釈 (Comment)**」フィールドに入力します。「**次へ (Next)**」をクリックします。
9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録する必要があります。「**ODBC 用にこのデータベースを登録**」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
10. 「**完了 (Finish)**」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。

関連タスク:

- 「*DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール*」の『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 「*DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール*」の『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

ディスカバリーによるデータベース接続の構成

構成アシスタントのディスカバリー機能を使用して、ネットワークでデータベースを検索できます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID をもっていることを確認します。

- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品をインストールしたシステムにデータベースを追加する場合、このインスタンスに対する SYSADM または SYSCTRL 権限をもつユーザー ID をもっていることを確認します。

制約事項:

以下の場合、ディスカバリー機能を使用してリモート・システムを検出できないことがあります。

- Administration Server がリモート・システムで実行されていない。
- ディスカバリー関数がタイムアウトになっている。デフォルトでは、ディスカバリー関数は 10 秒間ネットワークを検索します。この場合、時間が短すぎてリモート・システムを検出できないことがあります。DB2DISCOVERYTIME レジストリー変数を設定して、10 秒より長い期間を指定できます。
- ディスカバリー要求が実行されているネットワークが、ディスカバリー要求がその対象のリモート・システムに達しないように構成されている。

制約事項:

CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

手順:

ディスカバリーを使用してシステムにデータベースを追加するには、以下のステップを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)」を選択します。「データベースの追加」ウィザードが表示されます。
4. 「ネットワークの検索 (Search the network)」ラジオ・ボタンを使用して、「次へ (Next)」をクリックします。
5. 「既知のシステム (Known Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。クライアントに認識されているすべてのシステムのリストが表示されます。「その他のシステム (Other Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。ネットワーク上のすべてのシステムのリストが表示されます。
6. インスタンスとデータベースのリストを展開し、追加したいデータベースを選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
7. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、オプションでこのデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。
8. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
9. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、追加したデータベースを使えるようになりました。「クローズ (Close)」をクリックして、CA を終了します。

関連タスク:

- 56 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動構成』
- 57 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

Windows および Linux 上でのディスカバリーを使用したデータベース接続の構成

構成アシスタントのディスカバリー機能を使用して、ネットワークでデータベースを検索できます。

前提条件:

ディスカバリーを使用してデータベースへの接続を構成する前に、以下を行ってください。

- 有効な DB2 ユーザー ID をもっていることを確認します。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品をインストールしたシステムにデータベースを追加する場合、このインスタンスに対する SYSADM または SYSCTRL 権限をもつユーザー ID をもっていることを確認します。

制約事項:

CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

手順:

ディスカバリーを使用してシステムにデータベースを追加するには、以下のステップを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。以下のいずれかの方法で CA を開始することができます。
 - Windows システムの「スタート」メニューから開始します。
 - Linux システム上のアイコンから開始します。インスタンス所有者の環境からのみこのアイコンを使うことができます。それ以外の場合は、**db2icons** コマンドを使用して使用可能にする必要があります。
 - Windows システムと Linux システム上の **db2ca** コマンドから開始します。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」の下の「ウィザードを使用したデータベースの追加 (Add a database using wizard)」を選びます。
4. 「ネットワークの検索 (Search the network)」ラジオ・ボタンを使用して、「次へ (Next)」をクリックします。
5. 「既知のシステム (Known Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。クライアントに認識されているすべてのシステムのリストが表示されます。
6. システムの横の **[+]** 符号をクリックして、インスタンスおよびそのデータベースのリストを表示します。追加したいデータベースを選択し、「次へ (Next)」をクリックします。
7. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。

8. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
9. 「完了 (**Finish**)」をクリックします。これで、追加したデータベースを使えるようになりました。「クローズ (**Close**)」をクリックして、CA を終了します。

関連タスク:

- 54 ページの『Windows および Linux 上での構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の構成』

第 10 章 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用した接続の構成

コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント・サーバー接続の構成

このタスクでは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、DB2 クライアントからリモート・データベース・サーバーへの接続を構成する方法を説明します。

構成アシスタントを使用して、クライアントからサーバーへの接続を構成することもできます。

前提条件:

クライアントからサーバーへの接続を構成する前に、以下を行ってください。

- DB2 サーバーおよび DB2 クライアントで、通信を構成する必要があります。ご使用のオペレーティング・システムによって、通信は名前付きパイプ、NetBIOS または TCP/IP のいずれかとなります。
- サポートされる、クライアントからサーバーへの接続シナリオの 1 つを使用する必要があります。接続シナリオは、どのオペレーティング・システムがどの通信方式またはプロトコルを使用できるかを概説しています。

制約事項:

- Windows および UNIX 上の DB2 UDB サーバーは、APPC を使用したインバウンド・クライアント接続を受け入れなくなりました。DB2 Connect がインストールされている場合は、DB2 クライアントは引き続き、APPC を使用してホスト・システムに接続することができます。
- NetBIOS を使用して Windows クライアントから、UNIX ベースのシステム上で稼働しているサーバーに接続することはできません。

手順:

以下のようにして、コマンド行プロセッサを使用して、クライアントからサーバーへの接続を構成します。

1. 通信パラメーター値を確認し、記録します。
2. クライアントで適切な通信プロトコルを構成します。名前付きパイプについては、構成は必要ありません。
3. 以下の方式のいずれかを使用して、DB2 クライアントからデータベース・ノードをカタログします。採用する方式は、カタログするシステム上の通信プロトコル・セットアップに基づいて決めます。
 - DB2 クライアントから TCP/IP ノードをカタログします。
 - DB2 クライアントから NetBIOS ノードをカタログします。
 - DB2 クライアントから名前付きパイプ・ノードをカタログします。
4. DB2 クライアント上でデータベースをカタログします。
5. クライアントからサーバーへの接続をテストします。

関連タスク:

- 64 ページの『DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ』
- 65 ページの『DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ』
- 66 ページの『クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ』
- 67 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』
- 69 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』
- 53 ページの『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』

ノードのカタログ

DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ

TCP/IP ノードのカタログでは、DB2 クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードについて記述する項目が追加されます。この項目では、選択された別名 (*node_name*)、*hostname* (または *ip_address*)、およびクライアントがリモート・ホストにアクセスするときに使う *svcname* (または *port_number*) を指定します。

前提条件:

- システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限か、または *catalog_noauth* オプションが ON に設定されていることが必要です。root 権限を使用してノードをカタログすることはできません。

手順:

TCP/IP ノードのカタログを実行するには、以下のステップを実行します。

1. システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。
2. UNIX クライアントを使用している場合には、下記のようにしてインスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

ここで、*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

3. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
4. コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、ノードをカタログします。

```
db2 => catalog tcpip node node_name remote hostname|ip_address
server service_name|port_number [remote_instance instance_name]
[system system_name] [ostype os_type]
```

```
db2 => terminate
```

ここで、

- `node_name` は、カタログするデータベースが含まれているコンピューターに対して設定可能なニックネームです。
- `remote_instance` は、データベースが存在するサーバー・インスタンスの名前を表します。
- `system` は、サーバーを識別するための DB2 システム名です。
- `ostype` は、サーバーのオペレーティング・システムのタイプです。

注:

- a. **terminate** コマンドは、ディレクトリー・キャッシュをリフレッシュするために必要です。
- b. `remote_instance`、`system`、および `ostype` はオプションですが、DB2 ツールを使用するユーザーの場合は必須です。
- c. クライアントで使用される `service_name` は、サーバーのものと同じである必要はありません。しかし、そのマップ先ポート番号は同じでなければなりません。

例:

ポート番号 50000 を使用しているリモート・サーバー `myserver.ibm.com` 上で `db2node` を呼び出すためのノードをカタログするには、**db2** プロンプトで次のように入力します。

```
db2 => catalog tcpip node db2node remote myserverserver 50000
DB20000I The CATALOG TCPIP NODE command completed successfully.
DB21056W Directory changes may not be effective until the directory cache is refreshed.
```

```
db2 => terminate
DB20000I The TERMINATE command completed successfully.
```

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成』
- 69 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG TCPIP NODE コマンド』

DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ

NetBIOS ノードのカタログでは、クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードを記述する項目が追加されます。ノードの項目名には、選択したノード別名 (`node_name`) を使用します。この項目では、クライアントがリモート DB2 サーバーにアクセスするために使用するクライアントの論理アダプター番号 (`adapter_number`) とサーバーのワークステーション名 (`nname`) を指定します。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンする必要があります。DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムへデータベースを追加する場合は、システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。

- これらのパラメーター値の識別については、NetBIOS パラメーター値ワークシートNetBIOS パラメーター値ワークシートを参照してください。

手順:

NetBIOS ノードのカタログを実行するには、以下のようにします。

```
db2 => catalog netbios node node_name remote nname adapter adapter_number
```

```
db2 => terminate
```

たとえば、*db2node* というノードにリモート・データベース・サーバー *server1* をカタログするには、論理アダプター番号 *0* を使用して、以下のようにします。

```
db2 => catalog netbios node db2node remote server1 adapter 0
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成』
- 67 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『NetBIOS パラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG NETBIOS NODE コマンド』

クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ

名前付きパイプ・ノードのカタログでは、クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードを記述する項目が追加されます。この項目では、クライアントがリモート DB2 サーバーにアクセスするために使用するものとして選択された別名 (*node_name*)、リモート・サーバーのワークステーション名 (*computer_name*)、およびインスタンス名 (*instance_name*) を指定します。

手順:

DB2 クライアントで名前付きパイプ・ノードのカタログを実行するには、コマンド行プロセッサ (CLP) で以下のコマンドを入力します。

```
db2 => db2 catalog npipe node node_name /  
db2 => remote computer_name instance instance_name
```

```
db2 => terminate
```

例:

server1 というサーバーにある *db2node* というリモート・ノードをカタログするには、*db2* インスタンスで以下のようにします。

```
db2 => db2 catalog npipe node db2node remote server1 instance db2
```

```
db2 => terminate
```

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG NAMED PIPE NODE コマンド』

- 「インストールおよび構成 補足」の『クライアントでの名前付きパイプ構成のための名前付きパイプ・パラメーター値ワークシート』

CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用することによって、DB2 クライアントからデータベースのカタログを作成する方法について説明します。

クライアント・アプリケーションからリモート・データベースにアクセスできるようにするには、クライアント上にそのデータベースのカタログを作成する必要があります。データベースを作成すると、特に指定しない限りそのデータベースは、データベース名と同じデータベース別名を使って、サーバー上で自動的にカタログされます。

DB2 クライアントとリモート・データベースの接続確立には、データベース・ディレクトリー内の情報、および (ノード不要のローカル・データベースのカタログを実行するのではない限り) ノード・ディレクトリー内の情報が使用されます。

制約事項:

DB2 では、root 権限によるデータベースのカタログ作成はサポートされていません。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID が必要です。
- システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限か、または catalog_noauth オプションが ON に設定されていることが必要です。
- 下記のパラメーター値は、リモート・データベースのカタログに適用されます。
 - データベース名
 - データベース別名
 - ノード名
 - 認証タイプ (オプション)
 - コメント (オプション)

それらのパラメーター値について、また使用する値を記録することについての詳細は、データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシートを参照してください。

- 下記のパラメーター値は、ローカル・データベースのカタログに適用されます。
 - データベース名
 - ドライブ
 - データベース別名
 - 認証タイプ (オプション)
 - コメント (オプション)

ローカル・データベースは、いつでもアンカタログおよび再カタログできます。

手順:

クライアントでデータベースをカタログするには、以下のステップを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. オプション。データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシートの「使用値」欄を更新してください。
3. UNIX プラットフォームで DB2 UDB を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

INSTHOME はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

4. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
5. コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、データベースをカタログします。

```
db2 => catalog database database_name as database_alias at  
node node_name [ authentication auth_value ]
```

ここで、

- *database_name* は、カタログするデータベースの名前です。
- *database_alias* は、カタログするデータベースのローカル・ニックネームです。
- *node_name* は、カタログするデータベースが含まれているコンピューターに対して設定可能なニックネームです。
- *auth_value* は、データベースへの接続のときに行われる認証のタイプを指定します。このパラメーターのデフォルトは、サーバーで指定される認証タイプになります。認証タイプを指定すると、パフォーマンスが向上することがあります。認証値として指定できるオプションは、SERVER、CLIENT、SERVER_ENCRYPT、および KERBEROS です。

例:

sample というリモート・データベースを、ノード *db2node* においてローカル・データベース別名 *mysample* でカタログし、認証値として *server* を使用するには、次のコマンドを入力します。

```
db2 => catalog database sample as mysample at node db2node  
authentication server
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 69 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG DATABASE コマンド』

CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト

ノードとデータベースのカタログが終わったら、データベースに接続して接続のテストを実行する必要があります。

前提条件:

- 接続をテストするためには、その前にデータベース・ノードとデータベースのカタログを実行しておく必要があります。
- *userid* および *password* の値は、この 2 つが認証されるシステムで有効なものではなければなりません。デフォルトでは、認証はサーバー上で実行されます。サーバーのデータベース・マネージャー構成ファイルで指定されている認証パラメーターから、認証が判別されます。クライアントで構成された認証が、サーバーで構成された認証と不一致、または互換性がない場合は、エラーを受け取ります。
- DB2COMM で定義された正しいプロトコルによってデータベース・マネージャーが開始済みでなければなりません。まだ開始されていない場合には、データベース・サーバーで **db2start** コマンドを入力することによって、データベース・マネージャーを開始できます。

手順:

クライアントからサーバーへの接続をテストするには、以下のステップを実行します。

1. UNIX プラットフォームで DB2 を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

INSTHOME はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

2. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
3. クライアント側で次のコマンドを入力することにより、リモート・データベースに接続します。

```
db2 => connect to database_alias user userid
```

たとえば、次のコマンドを入力します。

```
connect to mysample user jtris
```

パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。

接続が正常に完了したら、接続先のデータベースの名前を示したメッセージが表示されます。下記のようなメッセージが表示されます。

```
Database Connection Information
Database server = DB2/NT 8.1.0
SQL authorization ID = JTRIS
Local database alias = mysample
```

これで、データベースを使用できるようになります。たとえば、システム・カタログ表にリストされているすべての表名のリストを取り出したい場合、次のような SQL ステートメントを入力します。

```
select tablename from syscat.tables
```

db2 terminate コマンドの後で SQL ステートメントを発行すると、暗黙接続となります。デフォルト・データベースを定義するには、**db2set db2dbdft = <dbname>** コマンドを実行します。このコマンドを実行した後、データベースに接続せずに、たとえば **db2 select * from <table>** コマンドを実行します。このコマンドは、**db2dbdft** で定義されている値を使用します。デフォルト以外のデータベースに接続するには、CONNECT コマンドを使用して、選択したデータベースに明示的に接続しなければなりません。

データベース接続の使用が終わったら、**connect reset** コマンドを入力してデータベース接続を終了します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

第 6 部 付録

付録 A. 言語サポート

DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)

DB2 のインターフェース言語は、メッセージ、ヘルプ、およびグラフィック・ツール・インターフェースで表示される言語です。DB2 のインストール時に、1 つ以上の言語サポートをインストールするオプションが示されます。インストール後、DB2 のインターフェース言語を、他のインストール済みインターフェース言語の 1 つに変更したい場合には、このタスクで概説されたステップを使用してください。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

前提条件:

使用する DB2 インターフェース言語を、ご使用のシステムにインストールする必要があります。DB2 のインストール時に DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 インターフェース言語を選択しインストールします。DB2 のインターフェース言語を、まだインストールしていないサポートされたインターフェース言語に変更する場合には、まず最初に DB2 インターフェース言語をオペレーティング・システムの言語にデフォルトで指定します。それがサポートされない場合には、英語に指定します。

手順:

Windows 上で DB2 のインターフェース言語を変更するには、ご使用の Windows オペレーティング・システムのデフォルトの言語設定を変更する必要があります。

次のようにして、Windows 上で DB2 インターフェース言語を変更します。

1. ご使用の Windows オペレーティング・システムのコントロール パネルで、「**地域 (Regional Options)**」を選択します。
2. 「**地域 (Regional Option)**」ダイアログ・ウィンドウで、システムのデフォルトの言語設定を、DB2 でインターフェースしたい言語に変更します。

ご使用のオペレーティング・システムのヘルプを参照して、デフォルトのシステム言語の変更についての追加情報を参照してください。

関連資料:

- 「**管理ガイド: プランニング**」の『サポートされているテリトリー・コードおよびコード・ページ』
- 74 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』

DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)

DB2 のインターフェース言語は、メッセージ、ヘルプ、およびグラフィック・ツール・インターフェースで表示される言語です。DB2 のインストール時に、1 つ以上の言語サポートをインストールするオプションが示されます。インストール後、DB2 のインターフェース言語を、他のインストール済みインターフェース言語の 1 つに変更したい場合には、このタスクで概説されたステップを使用してください。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

前提条件:

使用する DB2 インターフェース言語のサポートを、ご使用のシステムにインストールする必要があります。DB2 インターフェース言語サポートは、DB2 のインストール時に DB2 セットアップ・ウィザードを使用して選択し、インストールします。DB2 のインターフェース言語を、まだインストールしていないサポートされたインターフェース言語に変更する場合には、まず最初に DB2 インターフェース言語をオペレーティング・システムの言語にデフォルトで指定します。それがサポートされない場合には、英語に指定します。

手順:

UNIX システムで DB2 インターフェース言語を変更するには、LANG 環境変数を希望のロケールに設定します。

たとえば、DB2 for AIX でフランス語を使用して DB2 にインターフェースするには、フランス語言語サポートをインストールして、LANG 環境変数をフランス語ロケール (たとえば fr_FR) に設定する必要があります。

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリー・コードおよびコード・ページ』
- 74 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』

サポートされる DB2 インターフェース言語

DB2 インターフェースの DB2 言語サポートは、サーバー・グループ言語とクライアント・グループ言語に分類できます。サーバー・グループ言語は、メッセージ、ヘルプおよび DB2 グラフィカル・インターフェース・エレメントのほとんどを翻訳します。クライアント・グループ言語は、メッセージのほとんどと特定のヘルプ・ドキュメンテーションを含む、DB2 Run-time Client コンポーネントを翻訳します。

サーバー・グループ言語には、ブラジル・ポルトガル語、チェコ語、デンマーク語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語、ポーランド語、ロシア語、中国語 (簡体字)、スペイン語、スウェーデン語、中国語 (繁体字) が含まれます。

クライアント・グループ言語には、アラビア語、ブルガリア語、クロアチア語、オランダ語、ギリシャ語、ヘブライ語、ハンガリー語、ポルトガル語、ルーマニア語、スロバキア語、スロベニア語、トルコ語が含まれます。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 73 ページの『DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)』
- 74 ページの『DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『各国語バージョン』
- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリー・コードおよびコード・ページ』
- 「管理ガイド: プランニング」の『コード・ページ 923 および 924 の変換表』
- 「管理ガイド: プランニング」の『ユーロを使用可能なコード・ページ遷移表ファイル』

別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID

DB2 セットアップ・ウィザードを、ご使用のコンピューターのデフォルトの言語以外の言語で実行する場合には、言語 ID を指定して、手動で DB2 セットアップ・ウィザードを開始することができます。指定する言語は、インストールを実行するプラットフォームで選択可能なものでなければなりません。

表 2. 言語 ID

言語	言語 ID
アラビア語	ar
ブラジル・ポルトガル語	br
ブルガリア語	bg
中国語 (簡体字)	cn
中国語 (繁体字)	tw
クロアチア語	hr
チェコ語	cz
デンマーク語	dk
オランダ語	nl

表2. 言語 ID (続き)

言語	言語 ID
英語	en
フィンランド語	fi
フランス語	fr
ドイツ語	de
ギリシャ語	el
ヘブライ語	iw
ハンガリー語	hu
イタリア語	it
日本語	jp
韓国語	kr
ノルウェー語	no
ポーランド語	pl
ポルトガル語	pt
ルーマニア語	ro
ロシア語	ru
スロバキア語	sk
スロベニア語	sl
スペイン語	es
スウェーデン語	se
トルコ語	tr

付録 B. DB2 の除去

DB2 UDB のアンインストール (Windows)

ここでは、Windows オペレーティング・システムから DB2 UDB バージョン 8 を完全に削除する方法について説明します。この作業は、既存の DB2 インスタンスおよびデータベースが必要でなくなった場合以外は実行しないでください。

手順:

Windows から DB2 UDB バージョン 8 を削除するには、以下のステップを実行します。

1. すべてのデータベースをドロップします。データベースをドロップするには、コントロール・センターまたは **drop database** コマンドを使用します。
2. DB2 のすべてのプロセスおよびサービスを停止します。それには、Windows の「サービス」パネルを使用するか、または **db2stop** コマンドを使用します。DB2 を削除する前に DB2 のサービスおよびプロセスを停止しないなら、メモリー中に DB2 DLL がロードされているプロセスとサービスのリストを示す警告が表示されます。
3. Windows の「コントロール パネル」の「アプリケーションの追加と削除」を使用して、DB2 製品を削除します。Windows オペレーティング・システムからソフトウェア製品を削除する方法については、オペレーティング・システムのヘルプを参照してください。
4. DB2 をサイレンス除去するには、以下のコマンドをコマンド行に入力します。

```
msiexec /x <product_code> /qn
```

<product code> は除去したい製品のコードです。DB2 製品コードのリストを以下に示します。

- ESE {D8F53726-C7AD-11D4-9155-00203586D551}
- WSE {7A28F948-4945-4BD1-ACC2-ADC081C24830}
- PE {C0AA883A-72AE-495F-9601-49F2EB154E93}
- WM {84AF5B86-19F9-4396-8D99-11CD91E81724}
- DLM {1D16CA65-F7D9-47E5-BB26-C623A44832A3}
- RCON {273F8AB8-C84B-4EE6-85E7-D7C5270A6D08}
- CONEE {9C8DFB63-66DE-4299-AC6B-37D799A728A2}
- CONPE {F1912044-6E08-431E-9B6D-90ED10C0B739}
- ADMCL {ABD23811-AA8F-416B-9EF6-E54D62F21A49}
- ADCL {68A40485-7F7F-4A91-9AB6-D67836E15CF2}
- RTCL {63F6DCD6-0D5C-4A07-B27C-3AE3E809D6E0}
- GSE {F6846BF9-F4B5-4BB2-946D-3926795D5749}
- LSDC {DD30AEB3-4323-40D7-AB39-735A0523DEF3}
- WMC {5FEA5040-22E2-4760-A88C-73DE82BE4B6E}

- DOC {73D99978-A255-4150-B4FD-194ECF4B3D7C}
- QP {7A8BE511-8DF3-4F22-B61A-AF0B8755E354}
- CUBE {C8FEDF8F-84E8-442F-A084-0A0F6A772B52}
- EXP {58169F10-CA30-4F40-8C6D-C6DA8CE47E16}

関連タスク:

- 78 ページの『DB2 UDB のアンインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『DROP DATABASE コマンド』

DB2 UDB のアンインストール (UNIX)

ここでは、UNIX オペレーティング・システムから DB2 バージョン 8 を削除する方法について説明します。新しいバージョンの DB2 をインストールする場合、この作業は不要です。UNIX 上の DB2 は、バージョンごとにインストール・パスが異なっているため、同じコンピューター上に複数のバージョンを混在させることが可能です。

手順:

UNIX から DB2 UDB を削除するには、以下のステップを実行します。

1. オプション: すべてのデータベースをドロップします。データベースをドロップするには、コントロール・センターまたは **drop database** コマンドを使用します。
2. DB2 Administration Server を停止します。
3. Administration Server を削除します。
4. DB2 インスタンスを停止します。
5. DB2 インスタンスを削除します。
6. DB2 製品を削除します。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 79 ページの『DB2 Administration Server (DAS) の停止』
- 79 ページの『DB2 Administration Server (DAS) の削除』
- 80 ページの『DB2 インスタンスの停止』
- 81 ページの『DB2 インスタンスの削除』
- 81 ページの『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』
- 77 ページの『DB2 UDB のアンインストール (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『DROP DATABASE コマンド』

DB2 Administration Server (DAS) の停止

UNIX システムにおいて DB2 を削除する前に、DB2 Administration Server (DAS) を停止する必要があります。

手順:

Administration Server を停止するには、以下のステップを実行します。

1. DB2 Administration Server の所有者としてログインします。
2. **db2admin stop** コマンドを入力することによって、DB2 Administration Server を停止します。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 81 ページの『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2admin - DB2 Administration Server コマンド』

DB2 Administration Server (DAS) の削除

DB2 を削除する前に、DB2 Administration Server (DAS) を削除する必要があります。

手順:

DB2 Administration Server を削除するには、以下のステップを実行します。

1. DB2 Administration Server の所有者としてログインします。
2. 下記のようにして、始動スクリプトを実行します。

```
. DASHOME/das/dasprofile (bash, Bourne, または Korn シェルの場合)
source DASHOME/das/dascshrc (C シェルの場合)
```

DASHOME は、DB2 Administration Server のホーム・ディレクトリーです。
3. *DASHOME/das* ディレクトリー内のファイルをバックアップします。
4. ログオフします。
5. root としてログインし、コマンド **DB2DIR/instance/dasdrop** を入力することによって、DB2 Administration Server を削除します。

DB2DIR は、*/usr/opt/db2_08_01* (AIX の場合)、および */opt/IBM/db2/V8.1* (その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合) です。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 81 ページの『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』

DB2 インスタンスの停止

DB2 を除去するには、その前にすべての DB2 インスタンスを停止する必要があります。

手順:

DB2 インスタンスを停止するには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. システム上のすべての DB2 インスタンスの名前のリストを取得するため、**DB2DIR/bin/db2ilist** コマンドを入力します。

DB2DIR は、*/usr/opt/db2_08_01* (AIX の場合)、および */opt/IBM/db2/V8.1* (その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合) です。

3. ログアウトします。
4. 停止するインスタンスの所有者としてログインします。
5. 下記のようにして、始動スクリプトを実行します。

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile      (bash、 Bourne、または Korn シェルの場合)
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc  (C シェルの場合)
```

INSTHOME は、インスタンスのホーム・ディレクトリーです。

6. 必要に応じて、*INSTHOME*/sql1lib ディレクトリー内のファイルをバックアップします (*INSTHOME* はインスタンス所有者のホーム・ディレクトリー)。
7. データベース・マネージャー構成ファイル、db2system、 db2nodes.cfg ファイル、または *INSTHOME*/sql1lib/function 内のユーザー定義関数または fenced ストアード・プロシージャ・アプリケーションを保存しておきたいと思いかもしれません。
8. **db2 force application all** コマンドを入力することによって、すべてのデータベース・アプリケーションを停止します。
9. **db2stop** コマンドを入力することによって、 DB2 データベース・マネージャーを停止します。
10. **db2 terminate** コマンドを入力することによって、実際にインスタンスが停止していることを確認します。
11. インスタンスごとに、上記の手順を繰り返します。

UNIX での DB2 の削除における次のステップは、 DB2 インスタンスの削除です。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2stop - DB2 の停止コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『FORCE APPLICATION コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2ilist - インスタンスのリスト・コマンド』

DB2 インスタンスの削除

システムから、DB2 バージョン 8 インスタンスの一部またはすべてを削除できます。インスタンスを削除すると、そのインスタンスの所有する DB2 データベースがあれば、それらはすべて使用できなくなります。DB2 インスタンスは、DB2 バージョン 8 製品を使用しないことにした場合、または既存のインスタンスをそれ以降の DB2 のバージョンに移行しないようにする場合以外は、削除しないようにしてください。

手順:

インスタンスを削除するには、以下のステップを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 下記のコマンドを入力することによって、インスタンスを削除します。

```
DB2DIR/instance/db2idrop InstName
```

DB2DIR は、*/usr/opt/db2_08_01* (AIX の場合)、および */opt/IBM/db2/V8.1* (その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合) です。

db2idrop コマンドは、インスタンスのリストからインスタンスの項目を削除し、*INSTHOME/sqllib* ディレクトリーを削除します (*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリー、*InstName* はインスタンスのログイン名)。*/sqllib* ディレクトリーにファイルを保管している場合、それらのファイルはこのアクションによって除去されます。そうしたファイルがまだ必要ならば、インスタンスをドロップする前にコピーを作成しなければなりません。

3. オプション: root 権限を付与されたユーザーとして、インスタンス所有者のユーザー ID とグループを削除します (そのインスタンス専用の場合)。インスタンスを再び作成する予定の場合、それらは削除しないでください。

インスタンス所有者とインスタンス所有者グループは他の目的のために使用されることがあるので、このステップはオプションです。

UNIX での DB2 の削除における次のステップは、DB2 製品の削除です。

関連タスク:

- 81 ページの『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2idrop - インスタンスの除去コマンド』

db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)

ここでは、**db2_deinstall** コマンドを使用することによって、DB2 バージョン 8 の製品を削除する方法について説明します。**db2_deinstall** コマンドを実行すると、システムからすべての DB2 製品が削除されます。DB2 製品の一部分だけを削除するには、オペレーティング・システム付属のツールを使用して、DB2 コンポーネント、パッケージ、またはファイル・セットを削除してください。

前提条件:

UNIX システムから DB2 製品を削除する前に、以下を行ってください。

- UNIX システムから DB2 製品を削除する前に、『UNIX での DB2 の削除』で説明されているステップをすべて実行してください。
- DB2 製品を削除するには、root 権限が必要です。
- **db2_deinstall** コマンドを使用するには、製品 CD-ROM が必要です。
db2_deinstall コマンドは、DB2 バージョン 8 の製品 CD-ROM のルート・ディレクトリーにあります。

手順:

UNIX システムから DB2 製品を削除するには、以下のステップを実行します。

1. root 権限を付与されたユーザーとしてログインします。
2. DB2 バージョン 8 製品 CD-ROM をマウントします。
3. DB2 バージョン 8 製品 CD-ROM のルート・ディレクトリーから、
db2_deinstall -n コマンドを実行します。 *-n* パラメーターを指定することにより、**pkgrm** は非対話式に実行されます。 *-n* パラメーターは System V (Solaris) 専用です。

このコマンドを実行すると、システムからすべての DB2 製品が削除されます。

これ以外にも、オペレーティング・システムから DB2 製品を削除する方法があります。システムから DB2 製品の一部分だけを削除する場合は、下記のいずれかの方法を使用できます。DB2 製品を削除するその他の方法は、下記のとおりです。

AIX システム管理インターフェース・ツール (SMIT) を使用することによって、DB2 製品の一部またはすべてを削除できます。SMIT を使用して DB2 を削除する場合、接頭部 **db2_08_01** によって DB2 バージョン 8 の製品を指定できます。また、**installp** コマンドを使用すると、AIX システムからすべての DB2 製品を削除できます。その場合は、**installp -u db2_08_01** と入力します。

HP-UX

swremove コマンドを使用することによって、DB2 製品の一部またはすべてを削除できます。

Linux rpm コマンドを使用することによって、DB2 製品の一部またはすべてを削除できます。

Solaris オペレーティング環境

pkgrm コマンドを使用することによって、DB2 製品の一部またはすべてを削除できます。

関連タスク:

- 81 ページの『DB2 インスタンスの削除』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 FixPak の削除』

付録 C. DB2 Universal Database の技術情報の概要

DB2 資料とヘルプ

DB2[®] 技術情報は、以下のツールと方法を介して利用できます。

- DB2 インフォメーション・センター
 - トピック
 - DB2 ツールのヘルプ
 - サンプル・プログラム
 - チュートリアル
- ダウンロード可能な PDF ファイル、CD 上の PDF ファイル、および印刷された資料
 - ガイド
 - リファレンス・マニュアル
- コマンド行ヘルプ
 - コマンド・ヘルプ
 - メッセージ・ヘルプ
 - SQL 状態ヘルプ
- インストール済みソース・コード
 - サンプル・プログラム

ibm.com[®] にある技術資料、白書、Redbooks[™] その他の DB2 Universal Database[™] 技術情報にオンラインでアクセスできます。DB2 Information Management ソフトウェア・ライブラリー・サイト (www.ibm.com/software/data/pubs/) にアクセスしてください。

DB2 資料の更新

IBM[®] は、DB2 インフォメーション・センターの資料のフィックスパックやその他の資料更新を定期的に発行しています。DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にアクセスすれば、常に最新の情報が掲載されます。DB2 インフォメーション・センターをローカル・インストールしている場合、更新記事を表示するには、まず手動で更新をインストールしてください。新しい情報が発表されたときに資料を更新することにより、DB2 インフォメーション・センター CD からインストールした情報を更新することができます。

インフォメーション・センターの方が、PDF 資料やハードコピー資料よりも頻繁に更新されます。DB2 の最新の技術情報を入手するには、資料更新が発行されたときにそれをインストールするか、または www.ibm.com サイトの DB2 インフォメーション・センターにアクセスしてください。

関連概念:

- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『CLI サンプル・プログラム』

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Java サンプル・プログラム』
- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 104 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 95 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 107 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 97 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 インフォメーション・センター

DB2[®] インフォメーション・センターを使用すると、DB2 Universal Database[™]、DB2 Connect[™]、DB2 Information Integrator および DB2 Query Patroller[™] などの DB2 ファミリー製品を最大限に活用するのに必要なすべての情報にアクセスできます。また、DB2 インフォメーション・センターは、DB2 の主な機能とコンポーネントに関する情報を提供します (レプリケーション、データウェアハウジング、および DB2 の種々の Extender など)。

Mozilla 1.0 以上または Microsoft[®] Internet Explorer 5.5 以上で表示する場合、DB2 インフォメーション・センターには以下の機能があります。以下のいくつかの機能では、JavaScript[™] のサポートを使用可能にする必要があります:

柔軟なインストール・オプション

以下の中から、ご使用の環境に最も適したオプションを使って DB2 資料を表示できます。

- 最新の資料を常に自動的に利用できるようにするには、IBM[®] の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターからすべての資料に直接アクセスします。
- 更新処理を最小化し、イントラネット内のネットワーク・トラフィックだけに制限するには、イントラネット上の 1 つのサーバーに DB2 資料をインストールします。
- 柔軟性を改善し、ネットワーク接続への依存を軽減するには、個々のコンピューターに DB2 資料をインストールします。

検索 「検索」テキスト・フィールドに検索語を入力することにより、DB2 インフォメーション・センターのすべてのトピックを検索できます。複数の語句を引用符で囲めば、完全一致を検索できます。また、ワイルドカード演算子 (*、?) とブール演算子 (AND、NOT、OR) を使用して検索を絞り込むことができます。

タスク指向の目次

単一の目次の中から、DB2 資料のトピックを見付けることができます。目

次は、主に実行するタスクの種類に従って編成されていますが、そのほかに製品概要、特定のゴール (目的) の情報、参照情報、索引、および用語集も含まれます。

- 製品概要では、DB2 ファミリーで使用可能な製品間の関係、そうした各製品で提供される機能、および各製品の最新リリース情報について説明されています。
- インストール、管理および開発などのゴール・カテゴリには、タスクを迅速に完了し、そのための背景情報をよく理解できるようにするトピックが含まれています。
- 「参照」トピックでは、その対象に関する詳細な情報 (ステートメントとコマンドの構文、メッセージ・ヘルプ、構成パラメーターなど) が説明されています。

現在のトピックを目次に表示する

現在のトピックが目次のどの部分に該当するかを表示するには、目次フレーム内の「リフレッシュ/現在のトピックの表示 (Refresh/Show Current Topic)」ボタンをクリックするか、コンテンツ・フレーム内の「目次に表示 (Show in Table of Contents)」ボタンをクリックします。幾つかのファイルで関連トピックへの複数のリンクをたどった場合、または検索結果からトピックにアクセスした場合には、この機能が役立ちます。

索引 索引から、すべての資料にアクセスすることができます。索引では、用語が 50 音順に編成されています。

用語集 用語集を見れば、DB2 資料で使われているさまざまな用語の定義を調べることができます。用語集では、用語が 50 音順に編成されています。

組み込まれているローカライズ情報

DB2 インフォメーション・センターは、ブラウザで設定された言語でトピックを表示します。設定された言語のトピックが利用できない場合、DB2 インフォメーション・センターにはそのトピックの英語版が表示されます。

iSeries™ 技術情報については、IBM eServer™ iSeries Information Center (www.ibm.com/eserver/series/infocenter/) を参照してください。

関連概念:

- 86 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 95 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 96 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示』
- 94 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 88 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 91 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ

さまざまに異なる業務環境のもとでは、DB2[®] 情報にどのようにアクセスするかの要件もそれぞれ異なります。DB2 インフォメーション・センターにアクセスするには、IBM[®] の Web サイト、サーバーまたは組織のネットワーク、あるいはコンピューターへのインストールという 3 つの方法が可能です。この 3 つのケースのいずれも、資料は DB2 インフォメーション・センター内に置かれます。インフォメーション・センターは、ブラウザを使って表示できるように設計されたトピック・ベースの情報の Web サイトです。デフォルトでは、DB2 製品から、IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。これに対して、イントラネット・サーバーまたはご自分のコンピューターから DB2 インフォメーション・センターにアクセスしたい場合、製品メディア・パック内にある DB2 インフォメーション・センター CD から DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。以下では、DB2 資料へのアクセス・オプションの要約、および 3 つのインストール・シナリオを示します。これを参考にして、お客様の業務環境で DB2 インフォメーション・センターにアクセスするにはどの方法が最適か、どのようなインストール上の問題に配慮する必要があるかを判別してください。

DB2 資料にアクセスするオプションの要約:

以下の表は、お客様の実際の業務環境で、DB2 インフォメーション・センターの DB2 製品情報にアクセスする方法としてどんなオプションが推奨されるかを示します。

インターネット・アクセス	イントラネット・アクセス	推奨されるアクション
はい	はい	IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス、またはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターへのアクセス
はい	いいえ	IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス
いいえ	はい	イントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターへのアクセス
いいえ	いいえ	ローカル・コンピューター上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス

シナリオ: コンピューター上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス:

Tsu-Chen 氏は小さな町で工場を経営していますが、その町には、インターネット・アクセスを提供する地元のインターネット・サービス・プロバイダーがありません。彼は、在庫、製品オーダー、銀行口座情報、および営業経費を管理するために DB2 Universal Database[™] を購入しました。Tsu-Chen 氏は以前に DB2 製品を利用したことがないので、DB2 の使用方法を習得するために、DB2 製品資料を参照する必要があります。

Tsu-Chen 氏は 標準インストール・オプションを使って DB2 Universal Database を自分のコンピューターにインストールした後、DB2 資料にアクセスしようとしてみます。しかし、開こうとしているページが見つからないというエラー・メッセージがブラウザから通知されました。Tsu-Chen 氏は DB2 製品のインストール・マニュアルを調べた結果、DB2 資料を自分のコンピューター上で利用するには、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければならないことに気がきます。そしてメディア・パックの中にあった DB2 インフォメーション・センター CD を見つけ出して、インストールしました。

これで、Tsu-Chen 氏はオペレーティング・システムのアプリケーション・ランチャーから DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、より良い業務成果をあげるために DB2 製品を利用する方法を習得できます。

シナリオ: IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス:

Colin は、あるセミナー企業に所属する情報技術コンサルタントです。彼の専門はデータベース・テクノロジーおよび SQL で、DB2 Universal Database を使って北米一帯の企業を対象にこれらの科目のセミナーを開催しています。Colin のセミナーでは、教材として DB2 資料も使用されます。たとえば、SQL の講習コースでは、データベース照会の基本構文と拡張構文を教えるために SQL に関する DB2 資料が使用されます。

Colin が教えている企業の大半はインターネット・アクセスを配備しています。このような状況から判断して、Colin は、最新バージョンの DB2 Universal Database を自分のモバイル・コンピューターにインストールしたとき、IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスするよう構成しました。この構成によって、Colin はセミナーで教えるときに最新の DB2 資料にオンライン・アクセスすることができます。

しかし、時折、Colin は移動中にインターネット・アクセスを利用できないことがあります。これは問題となります。担任するセミナーの準備のために DB2 資料にアクセスする必要がある場合には、とくにそうです。このような事態が起きないようにするために、Colin は自分のモバイル・コンピューターに DB2 インフォメーション・センターのコピーをインストールしました。

こうして、Colin は常に DB2 資料のコピーを自在に活用できるようになりました。**db2set** コマンドを使って自分のモバイル・コンピューターのレジストリー変数を簡単に構成し、どこにいるかに応じて、IBM Web サイトまたは自分のモバイル・コンピューターから DB2 インフォメーション・センターにアクセスできます。

シナリオ: イン트라ネット・サーバー上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス:

Eva は、生命保険会社のデータベース上級管理者です。彼女は管理業務の一環として、会社の UNIX[®] データベース・サーバーに最新バージョンの DB2 Universal Database をインストールおよび構成します。彼女の会社は最近、セキュリティ上の理由から、インターネット・アクセスをほぼ業務で利用できないようにすると社員に通知しました。同社はネットワーク環境を装備しているため、Eva は DB2 インフォメーション・センターのコピーをイントラネット・サーバー上にインストール

ールして、社内のデータウェアハウスを定期的にご利用するすべての社員（営業担当者、営業部長、および業務分析担当者）から DB2 資料へのアクセスを可能にすることにしました。

Eva は、応答ファイルを使って全社員のコンピューター上に最新バージョンの DB2 Universal Database をインストールするようデータベース・チームに指示します。その際、イントラネット・サーバーのホスト名とポート番号を使って DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるよう、確実に各コンピューターを構成します。

しかし、Eva のチームの下級データベース管理者である Migual の誤解によって、数人の社員のコンピューター上で、イントラネット・サーバーの DB2 インフォメーション・センターにアクセスするよう DB2 Universal Database を構成する代わりに、DB2 インフォメーション・センターのコピーをそれらのコンピューターにインストールしてしまいました。これを訂正するために、Eva は、**db2set** コマンドを使ってこれらのコンピューター上の DB2 インフォメーション・センターのレジストリー変数（ホスト名は DB2_DOCHOST、ポート番号は DB2_DOCPORT）を変更するよう Migual に指示しました。これで、ネットワーク上の適切なすべてのコンピューターが DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、社員は DB2 に関する質問の答えを DB2 資料から見つけることができます。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 95 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 88 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 91 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)

DB2 製品資料にアクセスする方法として、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはコンピューターにインストールしたバージョンの 3 つがあります。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイト上の DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーまたはコンピューター上の DB2 資料にアクセスしたい場合には、DB2 インフォメーション・センター CD から資料をインストールする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用すれば、インストール設定を定義し、UNIX オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。

前提条件:

このセクションでは、UNIX コンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールするためのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の諸要件を一覧で示します。

• ハードウェア要件

以下のいずれかのプロセッサが必要です。

- PowerPC (AIX)
- HP 9000 (HP-UX)
- Intel 32 ビット (Linux)
- Solaris UltraSPARC コンピューター (Solaris オペレーティング環境)

• オペレーティング・システム要件

以下のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- IBM AIX 5.1 (PowerPC 上)
- HP-UX 11i (HP 9000 上)
- Red Hat Linux 8.0 (Intel 32 ビット上)
- SuSE Linux 8.1 (Intel 32 ビット上)
- Sun Solaris バージョン 8 (Solaris オペレーティング環境の UltraSPARC コンピューター上)

注: DB2 インフォメーション・センターは、DB2 クライアントをサポートする UNIX オペレーティング・システム上で稼動します。このため、IBM Web サイトから DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、イントラネット・サーバーに DB2 インフォメーション・センターをインストールしてそれにアクセスすることをお勧めします。

• ソフトウェア要件

- 以下のブラウザがサポートされています。

- Mozilla バージョン 1.0 以上

• DB2 セットアップ・ウィザードは、グラフィック・インストーラーです。ご使用のマシンで DB2 セットアップ・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェイスを表示可能にする X Window システム・ソフトウェアをインプリメントする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを実行する前に、ディスプレイを正しくエクスポートしたことを確認してください。たとえば、コマンド・プロンプトで

```
export DISPLAY=9.26.163.144:0.
```

というコマンドを入力します。

• 通信要件

- TCP/IP

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、以下のようになります。

1. システムにログオンします。

2. DB2 インフォメーション・センター製品 CD を挿入してシステムにマウントします。
3. 次のコマンドを入力して、CD がマウントされているディレクトリーに移動します。

```
cd /cd
```

/cd は、CD のマウント・ポイントを表します。

4. **/db2setup** コマンドを入力して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。
5. IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが開きます。DB2 インフォメーション・センターのインストールに直接進むには、「製品のインストール」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックします。「キャンセル」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。
6. 「インストールしたい製品を選択します」ページでは、「次へ」をクリックします。
7. 「**DB2 セットアップ・ウィザードによるこそ (Welcome to the DB2 Setup wizard)**」ページで、「次へ」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードは、プログラムのセットアップ操作を案内します。
8. インストールを続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。「ご使用条件」ページで、「ご使用条件に同意します (**I accept the terms in the license agreement**)」をクリックして、「次へ」をクリックします。
9. 「インストール・アクションの選択」で、「このコンピューターに **DB2 インフォメーション・センターをインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)**」を選択します。応答ファイルを使用して、このコンピューターまたは他のコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをあとでインストールしたい場合には、「設定を応答ファイルに保管する」を選択します。「次へ」をクリックします。
10. 「インストールする言語の選択」ページでは、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ」をクリックします。
11. 「**DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定**」ページでは、DB2 インフォメーション・センターへの着信通信を構成します。「次へ」をクリックしてインストールを続けます。
12. 「ファイルのコピーの開始」ページでは、インストールの選択項目を確認します。設定を変更するには、「戻る」をクリックします。「インストール」をクリックすると、DB2 インフォメーション・センターのファイルがコンピューターにコピーされます。

このほか、応答ファイルを使って DB2 インフォメーション・センターをインストールすることもできます。

インストール・ログ db2setup.his、db2setup.log、および db2setup.err は、デフォルトでは /tmp ディレクトリーに置かれます。

db2setup.log ファイルは、エラーも含めた DB2 製品のインストール情報をすべてキャプチャーします。db2setup.his ファイルは、コンピューター上の DB2 製品

インストール内容をすべて記録します。DB2 は、db2setup.log ファイルを db2setup.his に付加します。db2setup.err ファイルは、Java から戻されるすべてのエラー出力 (例外やトラップの情報など) をキャプチャーします。

インストールが完了したら、ご使用の UNIX オペレーティング・システムに応じて、DB2 は以下のいずれかのディレクトリーにインストールされます。

- AIX: /usr/opt/db2_08_01
- HP-UX: /opt/IBM/db2/V8.1
- Linux: /opt/IBM/db2/V8.1
- Solaris オペレーティング環境: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 86 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』
- 95 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 96 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示』
- 94 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 91 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)

DB2 製品資料にアクセスする方法として、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはコンピューターにインストールしたバージョンの 3 つがあります。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイト上の DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーまたはコンピューター上の DB2 資料にアクセスしたい場合には、DB2 インフォメーション・センター CD から DB2 資料をインストールする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用すれば、インストール設定を定義し、Windows オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。

前提条件:

このセクションでは、Windows に DB2 インフォメーション・センターをインストールするためのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の諸要件を一覧で示します。

• ハードウェア要件

以下のいずれかのプロセッサが必要です。

- 32 ビット・コンピューター: Pentium または Pentium 互換の CPU

• オペレーティング・システム要件

以下のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- Windows 2000
- Windows XP

注: DB2 インフォメーション・センターは、DB2 クライアントをサポートする Windows オペレーティング・システム上で稼動します。このため、IBM Web サイトの DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、イントラ ネット・サーバーに DB2 インフォメーション・センターをインストールしてそれにアクセスすることをお勧めします。

• ソフトウェア要件

- 以下のブラウザがサポートされています。
 - Mozilla 1.0 以上
 - Internet Explorer バージョン 5.5 または 6.0 (Windows XP の場合はバージョン 6.0)

• 通信要件

- TCP/IP

制約事項:

- DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、管理権限をもつアカウントが必要です。

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、以下のようになります。

1. DB2 インフォメーション・センターのインストールで定義したアカウントで、システムにログオンします。
2. CD をドライブに挿入します。自動実行機能が使用可能になっていれば、IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが起動します。
3. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別して、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。英語以外の言語でセットアップ・プログラムを実行したい場合、またはセットアップ・プログラムの自動始動が失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始できます。

次のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

- a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 「開く」フィールドで、以下のコマンドを入力します。

```
x:%setup.exe /i 2-letter language identifier
```

ここで、*x:* は CD ドライブ、*2-letter language identifier* (2 文字の言語識別子) はセットアップ・プログラムを実行する言語を表します。

- c. 「OK」をクリックします。
4. IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが開きます。DB2 インフォメーション・センターのインストールに直接進むには、「製品のインストール」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用

できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックします。「キャンセル」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。

5. 「インストールしたい製品を選択します」ページでは、「次へ」をクリックします。
6. 「DB2 セットアップ・ウィザードによるこそ (Welcome to the DB2 Setup wizard)」ページで、「次へ」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードは、プログラムのセットアップ操作を案内します。
7. インストールを続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。「ご使用条件」ページで、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」をクリックして、「次へ」をクリックします。
8. 「インストール・アクションの選択」で、「このコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。応答ファイルを使用して、このコンピューターまたは他のコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをあとでインストールしたい場合には、「設定を応答ファイルに保管する」を選択します。「次へ」をクリックします。
9. 「インストールする言語の選択」ページでは、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ」をクリックします。
10. 「DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定」ページでは、DB2 インフォメーション・センターへの着信通信を構成します。「次へ」をクリックしてインストールを続けます。
11. 「ファイルのコピーの開始」ページでは、インストールの選択項目を確認します。設定を変更するには、「戻る」をクリックします。「インストール」をクリックすると、DB2 インフォメーション・センターのファイルがコンピューターにコピーされます。

応答ファイルを使って DB2 インフォメーション・センターをインストールすることができます。また、**db2rspgn** コマンドを使って、既存のインストール内容に基づく応答ファイルを生成することもできます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、「マイ ドキュメント」¥DB2LOG¥ ディレクトリー内の db2.log ファイルと db2wi.log ファイルを参照してください。「マイ ドキュメント」ディレクトリーの場所は、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルは、DB2 の最新のインストール情報をキャプチャーします。db2.log は、DB2 製品のインストールの履歴をキャプチャーします。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 86 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』

- 95 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 96 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示』
- 94 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 88 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

DB2 インフォメーション・センターの呼び出し

DB2 インフォメーション・センターは、Linux、UNIX、および Windows オペレーティング・システム用の DB2 製品 (DB2 Universal Database、 DB2 Connect、DB2 Information Integrator、 DB2 Query Patroller など) を使用するために必要なすべての情報を提供します。

DB2 インフォメーション・センターは、以下の場所から呼び出すことができます。

- DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューター
- DB2 インフォメーション・センターがインストールされているイントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューター
- IBM の Web サイト

前提条件:

DB2 インフォメーション・センターを呼び出すための要件は、以下のとおりです。

- オプション: 希望する言語でトピックを表示するようブラウザを構成する
- オプション: コンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを使用するよう DB2 クライアントを構成する

手順:

DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューターから DB2 インフォメーション・センターを呼び出すには、以下のようになります。

- (Windows オペレーティング・システムの)「スタート」メニューから: 「スタート」→「プログラム」→「IBM DB2」→「情報」→「インフォメーション・センター」をクリックします。
- コマンド行プロンプトから:
 - Linux および UNIX オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs** コマンドを発行します。
 - Windows オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs.exe** コマンドを発行します。

イントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューターにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ <http://<host-name>:<port-number>/> を開きます (<host-name> はホスト名、<port-number> は DB2 インフォメーション・センターを利用可能なポート番号)。

IBM Web サイトにある DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/ を開きます。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 96 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示』
- 104 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 95 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 107 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> から利用できる DB2 インフォメーション・センターは、資料の新規追加または変更によって定期的に更新されます。さらに、更新された DB2 インフォメーション・センターをコンピューターまたはイントラネット・サーバーにダウンロードしてインストールできる場合もあります。DB2 インフォメーション・センターを更新しても、DB2 クライアント製品またはサーバー製品は更新されません。

前提条件:

インターネットに接続されたコンピューターへのアクセスが必要です。

手順:

DB2 インフォメーション・センターの更新をコンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストールするには、以下のようにします。

1. IBM の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターを開きます。
2. 「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」 ページの見出し「サービスおよびサポート」の「ダウンロード」セクションで、「**DB2 資料**」リンクをクリックします。

3. 最新のドキュメンテーション・イメージのレベルと、インストール済みのドキュメンテーション・レベルを比較して、DB2 インフォメーション・センターを更新する必要があるかどうかを確認します。「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」ページに、インストール済みのドキュメンテーションのレベルがリストされます。
4. より新しいバージョンの DB2 インフォメーション・センターが存在する場合、ご使用のオペレーティング・システムに対応する最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをダウンロードします。
5. 最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをインストールするには、Web ページの指示に従ってください。

関連概念:

- 86 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 94 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 88 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 91 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示

DB2 インフォメーション・センターでは、ブラウザの設定で指定した言語でのトピックの表示が試みられます。トピックがその指定言語に翻訳されていない場合は、DB2 インフォメーション・センターでは英語でトピックが表示されます。

手順:

Internet Explorer Web ブラウザーで、指定どおりの言語でトピックを表示するには、以下のようになります。

1. Internet Explorer の「ツール」→「インターネット オプション」→「言語...」ボタンをクリックします。「言語の優先順位」ウィンドウがオープンします。
2. 該当する言語が、言語リストの先頭の項目に指定されていることを確認します。
 - リストに新しい言語を追加するには、「追加...」ボタンをクリックします。

注: 言語を追加しても、特定の言語でトピックを表示するのに必要なフォントがコンピューターに備えられているとはかぎりません。

- リストの先頭に新しい言語を移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストに先頭に行くまで「上へ」ボタンをクリックします。
3. 使いたい言語で DB2 インフォメーション・センターを表示するには、ページをリフレッシュします。

Mozilla Web ブラウザーの場合に、使いたい言語でトピックを表示するには、以下のようになります。

1. Mozilla の「編集」→「設定」→「言語」ボタンをクリックします。「設定」ウィンドウに「言語」パネルが表示されます。
2. 該当する言語が、言語リストの先頭の項目に指定されていることを確認します。
 - リストに新しい言語を追加するには、「追加...」ボタンをクリックしてから、「言語を追加」ウィンドウで言語を選択します。
 - リストの先頭に新しい言語を移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストに先頭に行くまで「上に移動」ボタンをクリックします。
3. 使いたい言語で DB2 インフォメーション・センターを表示するには、ページをリフレッシュします。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

DB2 PDF 資料および印刷された資料

以下の表は、正式な資料名、資料番号、および PDF ファイル名を示しています。ハードコピー版の資料を注文するには、正式な資料名を知っておく必要があります。PDF ファイルを印刷するには、PDF ファイル名を知っておく必要があります。

DB2 資料は、以下のカテゴリーに分類されています。

- DB2 中核情報
- 管理情報
- アプリケーション開発情報
- ビジネス・インテリジェンス情報
- DB2 Connect 情報
- 入門情報
- チュートリアル情報
- オプション・コンポーネント情報
- リリース・ノート

以下の表は、DB2 ライブラリー内の各資料について、その資料のハードコピー版を注文したり、PDF 版を印刷または表示したりするのに必要な情報を示しています。DB2 ライブラリー内の各資料に関する詳細な説明については、www.ibm.com/shop/publications/order にある IBM Publications Center にアクセスしてください。

DB2 の基本情報

こうした資料の情報は、すべての DB2 ユーザーに基本的なもので、プログラマーおよびデータベース管理者にとって役立つ情報であるとともに、DB2 Connect、DB2 Warehouse Manager、または他の DB2 製品を使用するユーザーにとっても役立つ内容です。

表3. DB2 の基本情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database コマンド・リファレンス」	SC88-9140	db2n0j81
「IBM DB2 Universal Database 用語集」	資料番号なし	db2t0j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 1 巻」	GC88-9152 (ハードコピーな し)	db2m1j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 2 巻」	GC88-9153 (ハードコピーな し)	db2m2j81
「IBM DB2 Universal Database 新機能」	SC88-9158	db2q0j81

管理情報

これらの資料の情報は、DB2 データベース、データウェアハウス、およびフェデレーテッド・システムを効果的に設計し、インプリメントし、保守するために必要なトピックを扱っています。

表4. 管理情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: プランニング」	SC88-9135	db2d1j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: インプリメンテー ション」	SC88-9133	db2d2j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: パフォーマンス」	SC88-9134	db2d3j81
「IBM DB2 Universal Database 管理 API リファレンス」	SC88-9136	db2b0j81
「IBM DB2 Universal Database データ移動ユーティリティー ガイドおよびリファレンス」	SC88-9142	db2dmj81
「IBM DB2 Universal Database データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス」	SC88-9143	db2haj81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター 管理ガイド」	SC88-9165	db2ddj81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 1 巻」	SC88-9155	db2s1j81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 2 巻」	SC88-9156	db2s2j81

表 4. 管理情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database システム・モニター ガイドおよびリファレンス」	SC88-9157	db2f0j81

アプリケーション開発情報

これらの資料の情報は、DB2 Universal Database (DB2 UDB) のアプリケーション開発者またはプログラマーが特に興味を持つ内容です。サポートされるさまざまなプログラミング・インターフェース (組み込み SQL、ODBC、JDBC、SQLJ、CLI など) を使用して DB2 UDB にアクセスするのに必要な資料とともに、サポートされる言語およびコンパイラーについても紹介されています。また、DB2 インフォメーション・センターをご使用の場合には、サンプル・プログラムのソース・コードの HTML バージョンにアクセスすることもできます。

表 5. アプリケーション開発情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」	SC88-9137	db2axj81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング」	SC88-9138	db2a1j81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド サーバー・アプリケーションのプログラミング」	SC88-9139	db2a2j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」	SC88-9159	db2l1j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 2 巻」	SC88-9160	db2l2j81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター アプリケーション統合ガイド」	SC88-9166	db2adj81
「IBM DB2 Universal Database XML Extender 管理およびプログラミングのガイド」	SC88-9172	db2sxj81

ビジネス・インテリジェンス情報

これらの資料の情報は、さまざまなコンポーネントを使用して、DB2 Universal Database のデータウェアハウジング機能および分析機能を拡張する方法を説明しています。

表 6. ビジネス・インテリジェンス情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インフォメーション・カタログ・センター 管理ガイド」	SC88-9167	db2dij81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インストール・ガイド」	GC88-9164	db2idj81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition DB2 Warehouse Manager を使用時の ETI ソリューション・コンバージョン・プログラムの管理」	SC88-9894	iwhe1mstx80

DB2 Connect 情報

このカテゴリの情報は、DB2 Connect Enterprise Edition または DB2 Connect Personal Edition を使用して、メインフレーム・サーバーおよびミッドレンジ・サーバー上のデータにアクセスする方法を説明しています。

表 7. DB2 Connect 情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM コネクティビティ 補足」	資料番号なし	db2h1j81
「IBM DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」	GC88-9145	db2c6j81
「IBM DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9146	db2c1j81
「IBM DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」	SC88-9147	db2c0j81

入門情報

このカテゴリの情報は、サーバー、クライアント、および他の DB2 製品をインストールして構成する場合に役立ちます。

表 8. 入門情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database DB2 クライアント機能 概説およびインストール」	GC88-9144 (ハードコピーなし)	db2itj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 サーバー機能 概説およびインストール」	GC88-9148	db2isj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9150	db2ilj81
「IBM DB2 Universal Database インストールおよび構成 補足」	GC88-9149 (ハードコピーなし)	db2iyj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Data Links Manager 概説およびインストール」	GC88-9141	db2z6j81

チュートリアル情報

チュートリアル情報は、DB2 機能を紹介し、さまざまなタスクを実行する方法を示します。

表 9. チュートリアル情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介」	資料番号なし	db2tuj81
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド」	資料番号なし	db2taj81
「インフォメーション・カタログ・センター チュートリアル」	資料番号なし	db2aij81
「Video Central for e-business チュートリアル」	資料番号なし	db2twj81
「Visual Explain チュートリアル」	資料番号なし	db2tvj81

オプション・コンポーネント情報

このカテゴリーの情報は、DB2 のオプション・コンポーネントを使用する方法について説明しています。

表 10. オptional・コンポーネント情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Cube Views Guide and Reference」	SC18-7298	db2aax81
「IBM DB2 Query Patroller インストール、管理、使用法のガイド」	GC88-9154	db2dwj81
「IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」	SC88-9171	db2sbj81
「IBM DB2 Universal Database Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」	SC88-9169	db2z0x82
「DB2 Net Search Extender 管理およびユーザーズ・ガイド」	SH88-8546	N/A

注: この資料の HTML 版は、HTML ドキュメンテーション CD からインストールされません。

リリース・ノート

リリース・ノートは、ご使用の製品のリリースおよびフィックスパック・レベルに特有の追加情報を紹介します。また、リリース・ノートには、各リリース、アップデート、およびフィックスパックで組み込まれた資料上の更新の要約も含まれています。

表 11. リリース・ノート

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「DB2 リリース・ノート」	「注」を参照。	「注」を参照。
「DB2 インストール情報」	製品 CD-ROM でのみ参照可能。	使用できません。

注: リリース・ノートは以下の形式で入手できます。

- XHTML およびテキスト形式 (製品 CD 内)
- PDF 形式 (PDF ドキュメンテーション CD 内)

さらに、リリース・ノートの中で、『既知の問題と予備手段』および『リリース間の非互換性』に関する部分は DB2 インフォメーション・センターにも表示されます。

UNIX ベースのプラットフォームでテキスト形式でリリース・ノートを確認するには、Release.Notes ファイルを参照してください。このファイルは、DB2DIR/Readme/%L ディレクトリーに収録されています。%L はロケール名を表しています。DB2DIR は以下になります。

- AIX オペレーティング・システムの場合: /usr/opt/db2_08_01

- その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合:
/opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 83 ページの『DB2 資料とヘルプ』

関連タスク:

- 103 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』
- 104 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 104 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』

PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法

DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている DB2 資料を印刷することができます。Adobe Acrobat Reader を使用すれば、資料全体または特定のページを印刷できます。

前提条件:

Adobe Acrobat Reader がインストールされていることを確認してください。Adobe Acrobat Reader をインストールする必要がある場合、Adobe Web サイト (www.adobe.com) から入手できます。

手順:

PDF ファイルから DB2 資料を印刷するには以下のようにします。

1. *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をドライブに挿入します。UNIX オペレーティング・システムの場合、*DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をマウントします。UNIX オペレーティング・システムで CD をマウントする方法については、「概説およびインストール」を参照してください。
2. `index.htm` を開きます。ブラウザ・ウィンドウにファイルが開きます。
3. 参照したい PDF のタイトルをクリックします。Acrobat Reader で PDF が開きます。
4. 「ファイル」 → 「印刷」を選択して、所要の資料の任意の部分を印刷します。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『HP-UX 上での CD-ROM のマウント』
- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 104 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Solaris)』

関連資料:

- 97 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 の印刷資料の注文方法

ハードコピー版の資料を望む場合には、以下のいずれかの方法で注文できます。

印刷資料の注文方法:

一部の国または地域では、印刷された資料を注文することもできます。お客様がお住まいの国または地域でこのサービスが利用可能かどうかを確認するには、お住まいの国または地域の IBM Publications Web サイトをご覧ください。資料のご注文が可能な場合、以下のようになすことができます。

- 正規の IBM 製品販売業者または営業担当員に連絡してください。お客様がお住まいの地域の IBM 担当員の情報については、お手数ですが IBM の Web サイト (www.ibm.com/planetwide) の IBM Worldwide Directory of Contacts で確認してください。
- IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。なお、IBM Publications Center から資料を注文できない国もあります。

DB2 製品がご利用可能になった時点で、印刷された資料は *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD にある PDF 形式の資料と同じものです。さらに、*DB2* インフォメーション・センター CD に収録されている印刷された資料の内容もまた、これらと同じです。ただし、*DB2* インフォメーション・センター CD には、PDF 資料にない追加情報も含まれます (たとえば、SQL 管理作業や HTML サンプル)。DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている資料の中には、ハードコピーとしてご注文できない資料もあります。

注: *DB2* インフォメーション・センターは、PDF またはハードコピーの資料よりも頻繁に更新されます。ドキュメンテーションの更新が入手可能になった時点でインストールするか、*DB2* インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) を参照して最新の情報を入手してください。

関連タスク:

- 103 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』

関連資料:

- 97 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す

コンテキスト・ヘルプは、特定のウィンドウ、ノートブック、ウィザード、またはアドバイザーに関連したタスクまたはコントロールの情報を提供します。コンテキスト・ヘルプは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースのある *DB2* 管理ツールおよび開発ツールから利用できます。コンテキスト・ヘルプには、以下の 2 種類があります。

- それぞれのウィンドウまたはノートブックにある「ヘルプ」ボタンからアクセス可能なヘルプ
- infopop (ポップアップ情報ウィンドウ)。これは、マウス・カーソルを特定のフィールドまたはコントロール上に置いたとき、またはウィンドウ、ノートブック、ウィザード、アドバイザー内でフィールドまたはコントロールを選択して F1 を押すと表示されます。

「ヘルプ」ボタンを押すと、概説、前提条件、およびタスク情報が表示されます。infopop は、それぞれのフィールドおよびコントロールについて説明します。

手順:

コンテキスト・ヘルプを呼び出すには、以下のようになります。

- ウィンドウおよびノートブックのヘルプを表示するには、いずれかの DB2 ツールを開始して、任意のウィンドウまたはノートブックを開きます。ウィンドウまたはノートブックの右下隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックして、コンテキスト・ヘルプを呼び出します。

また、それぞれの DB2 ツール・センターの上部にある「ヘルプ」メニュー項目からコンテキスト・ヘルプにアクセスすることもできます。

ウィザードおよびアドバイザーでは、最初のページの「タスクの概要」リンクをクリックすると、コンテキスト・ヘルプを表示できます。

- ウィンドウまたはノートブック上の各コントロールの infopop ヘルプを表示するには、コントロールをクリックしてから、**F1** を押します。コントロールの詳細情報を示すポップアップ情報が、黄色いウィンドウに表示されます。

注: フィールドまたはコントロールにマウス・カーソルを置いておくだけで infopops が表示されるようにするには、「ツール設定」ノートブックの「**文書 (Documentation)**」ページの「**infopops の自動表示**」チェック・ボックスを選択します。

infopop に似た別のコンテキスト・ヘルプに、診断ポップアップ情報があります。これにはデータ入力規則が示されます。診断ポップアップ情報は、無効または不十分なデータが入力されたとき、紫色のウィンドウに表示されます。診断ポップアップ情報は、以下に関して表示されます。

- 必須フィールド。
- 日付フィールドのように、正確なフォーマットを必要とするデータのフィールド。

関連タスク:

- 94 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 107 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 UDB ヘルプの使用方法: Common GUI help』
- 『DB2 コンテキスト・ヘルプと資料へのアクセスを設定する: Common GUI help』

コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す

メッセージ・ヘルプは、メッセージが出された原因と、エラーへの応答として実行すべきアクションを説明します。

手順:

メッセージ・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? XXXnnnnn
```

ここで、*XXXnnnnn* は有効なメッセージ ID を表します。

たとえば、? SQL30081 と入力すると、メッセージ SQL30081 に関するヘルプを表示します。

関連概念:

- 「メッセージ・リファレンス 第 1 巻」の『メッセージの概要』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す

コマンド・ヘルプは、コマンド行プロセッサでのコマンドの構文を説明します。

手順:

コマンド・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? command
```

ここで *command* はキーワードまたはコマンド全体を表します。

たとえば、? catalog と入力すると、すべての CATALOG コマンドに関するヘルプが表示され、? catalog database と入力すると、CATALOG DATABASE コマンドのヘルプだけが表示されます。

関連タスク:

- 104 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 94 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 107 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す

DB2 Universal Database は、SQL ステートメントの結果の原因となったと考えられる条件の SQLSTATE 値を戻します。SQLSTATE ヘルプは、SQL 状態および SQL 状態クラス・コードの意味を説明します。

手順:

SQL 状態ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? sqlstate または ? class code
```

ここで、*sqlstate* は有効な 5 桁の SQL 状態を、*class code* は SQL 状態の最初の 2 桁を表します。

たとえば、? 08003 を指定すると SQL 状態 08003 のヘルプが表示され、? 08 を指定するとクラス・コード 08 のヘルプが表示されます。

関連タスク:

- 94 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 106 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』

DB2 チュートリアル

DB2[®] チュートリアルは、DB2 Universal Database のさまざまな機能について学習するのを支援します。このチュートリアルでは、アプリケーションの開発、SQL 照会のパフォーマンス調整、データウェアハウスの処理、メタデータの管理、および DB2 を使用した Web サービスの開発の各分野で、段階的なレッスンが用意されています。

はじめに:

インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) から、このチュートリアルの XHTML 版を表示できます。

チュートリアルの中で、サンプル・データまたはサンプル・コードを使用する場合があります。個々のタスクの前提条件については、それぞれのチュートリアルを参照してください。

DB2 Universal Database チュートリアル:

以下に示すチュートリアルのタイトルをクリックすると、そのチュートリアルを表示できます。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介
データウェアハウス・センターを使用して簡単なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド

データウェアハウス・センターを使用して高度なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

インフォメーション・カタログ・センター・チュートリアル

インフォメーション・カタログを作成および管理して、インフォメーション・カタログ・センターを使用してメタデータを配置し使用します。

Visual Explain チュートリアル

Visual Explain を使用して、パフォーマンスを向上させるために SQL ステートメントを分析し、最適化し、調整します。

DB2 トラブルシューティング情報

DB2[®] 製品を使用する際に役立つ、トラブルシューティングおよび問題判別に関する広範囲な情報を利用できます。

DB2 ドキュメンテーション

トラブルシューティング情報は、DB2 インフォメーション・センター、および DB2 ライブラリーに含まれる PDF 資料の中でご利用いただけます。DB2 インフォメーション・センターで、(ブラウザー・ウィンドウの左側の) ナビゲーション・ツリーの「サポートおよびトラブルシューティング (Support and troubleshooting)」ブランチを参照すると、DB2 トラブルシューティング・ドキュメンテーションの詳細なリストが見つかります。

DB2 Technical Support の Web サイト

現在問題が発生していて、考えられる原因とソリューションを検索したい場合は、DB2 Technical Support の Web サイトを参照してください。

Technical Support サイトには、最新の DB2 出版物、TechNotes、プログラム診断依頼書 (APAR)、フィックスパック、DB2 内部エラー・コードの最新リスト、その他のリソースが用意されています。この知識ベースを活用して、問題に対する有効なソリューションを探し出すことができます。

DB2 Technical Support の Web サイト

(<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) にアクセスしてください。

DB2 Problem Determination Tutorial Series

DB2 製品で作業中に直面するかもしれない問題を素早く識別し、解決する方法に関する情報を見つけるには、DB2 Problem Determination Tutorial Series の Web サイトを参照してください。あるチュートリアルでは、使用可能な DB2 問題判別機能およびツールを紹介し、それらをいつ使用すべきかを判断する助けを与えます。別のチュートリアルは、『データベース・エンジン問題判別 (Database Engine Problem Determination)』、『パフォーマンス問題判別 (Performance Problem Determination)』、『アプリケーション問題判別 (Application Problem Determination)』などの関連トピックを扱っています。

DB2 Technical Support

(<http://www.ibm.com/software/data/support/pdm/db2tutorials.html>) には、DB2 問題判別チュートリアルがすべて揃っています。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 「問題判別の手引き」の『Introduction to Problem Determination - DB2 テクニカル・サポートのチュートリアル』

アクセス支援

アクセス支援機能は、身体に障害のある（身体動作が制限されている、視力が弱いなど）ユーザーがソフトウェア製品を十分活用できるように支援します。DB2®バージョン 8 製品に備わっている主なアクセス支援機能は、以下のとおりです。

- すべての DB2 機能は、マウスの代わりにキーボードを使ってナビゲーションできます。詳細については、『キーボードによる入力およびナビゲーション』を参照してください。
- DB2 ユーザー・インターフェースのフォント・サイズおよび色をカスタマイズすることができます。詳細については、110 ページの『アクセスしやすい表示』を参照してください。
- DB2 製品は、Java™ Accessibility API を使用するアクセス支援アプリケーションをサポートします。詳細については、110 ページの『支援テクノロジーとの互換性』を参照してください。
- DB2 資料は、アクセスしやすい形式で提供されています。詳細については、110 ページの『アクセスしやすい資料』を参照してください。

キーボードによる入力およびナビゲーション

キーボード入力

キーボードだけを使用して DB2 ツールを操作できます。マウスを使って実行できる操作は、キーまたはキーの組み合わせによっても実行できます。標準のオペレーティング・システム・キー・ストロークを使用して、標準のオペレーティング・システム操作を実行できます。

キーまたはキーの組み合わせによって操作を実行する方法について、詳しくは キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・ナビゲーション

キーまたはキーの組み合わせを使用して、DB2 ツールのユーザー・インターフェースをナビゲートできます。

キーまたはキーの組み合わせによって DB2 ツールをナビゲートする方法の詳細については、キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・フォーカス

UNIX® オペレーティング・システムでは、アクティブ・ウィンドウの中で、キー・ストロークによって操作できる領域が強調表示されます。

アクセスしやすい表示

DB2 ツールには、視力の弱いユーザー、その他の視力障害をもつユーザーのためにアクセシビリティを向上させる機能が備わっています。これらのアクセシビリティ拡張機能には、フォント・プロパティのカスタマイズを可能にする機能も含まれています。

フォントの設定

「ツール設定」ノートブックを使用して、メニューおよびダイアログ・ウィンドウに使用されるテキストの色、サイズ、およびフォントを選択できます。

フォント設定に関する詳細情報は、メニューおよびテキストのフォントを変更する: Common GUI help を参照してください。

色に依存しない

本製品のすべての機能を使用するために、ユーザーは必ずしも色を識別する必要はありません。

支援テクノロジーとの互換性

DB2 ツールのインターフェースは、Java Accessibility API をサポートします。これによって、スクリーン・リーダーその他の支援テクノロジーを DB2 製品で利用できるようになります。

アクセスしやすい資料

DB2 形式は、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で提供されています。XHTML により、ご使用のブラウザーに設定されている表示設定に従って資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーや他の支援テクノロジーを使用することもできます。

シンタックス・ダイアグラムはドット 10 進形式で提供されます。この形式は、スクリーン・リーダーを使用してオンライン・ドキュメンテーションにアクセスする場合にのみ使用できます。

関連概念:

- 110 ページの『ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム』

ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム

スクリーン・リーダーを使用してインフォメーション・センターを利用するユーザーのために、シンタックス・ダイアグラムがドット 10 進形式で提供されます。

ドット 10 進形式では、各シンタックス・エレメントは別々の行に書き込まれます。複数のシンタックス・エレメントが常に同時に存在する (または常に同時に不在の) 場合、単一のコンパウンド・シンタックス・エレメントとみなせるので同一行に表示できます。

各行は、ドット 10 進数で開始します。たとえば、3 または 3.1 ないしは 3.1.1 です。こうした数を適切に聞き取るには、スクリーン・リーダーが句読点を読み取るように設定されていることを確認してください。同じドット 10 進数を持つすべて

のシンタックス・エレメント (たとえば、3.1 という数値を持つすべてのシンタックス・エレメント) は、相互に排他的な代替エレメントです。3.1 USERID および 3.1 SYSTEMID という行を聞き取る場合、シンタックスには両方ではなく USERID または SYSTEMID のどちらかが含まれることが分かります。

ドット 10 進レベルは、ネストのレベルを表示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメントの後に、一連のドット 10 進数 3.1 のシンタックス・エレメントが続きます。3.1 の番号が付されたシンタックス・エレメントすべては、番号 3 の付されたシンタックス・エレメントに従属します。

シンタックス・エレメントに関する情報を追加するため、ドット 10 進数の次に特定のワードおよびシンボルが使用されます。時折、こうしたワードおよびシンボルはエレメントの最初に表示される場合もあります。簡単に識別するため、ワードやシンボルがシンタックス・エレメントの一部である場合には、円記号 (¥) 文字が先頭に付きます。* シンボルはドット 10 進数の次に使用でき、シンタックス・エレメントが反復することを示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメント *FILE は、3 ¥* FILE という形式になります。3* FILE という形式は、シンタックス・エレメント FILE が反復されることを示します。3* ¥* FILE という形式は、シンタックス・エレメント * FILE が反復されることを示します。

シンタックス・エレメントのストリングを分離するのに使用されるコンマなどの文字は、シンタックス内の分離する項目の直前に表示されます。こうした文字は、それぞれの項目と同一行に表示するか、同じドット 10 進数を持つ関連する項目のある別の行に表示できます。またその行には、シンタックス・エレメントに関する情報を提供する別のシンボルを表示することも可能です。たとえば、複数の LASTRUN および DELETE シンタックス・エレメントを使用している場合には、5.1*、5.1 LASTRUN、および 5.1 DELETE という行は、エレメントをコンマで区切る必要があります。区切り文字が指定されないと、各シンタックス・エレメントを区切るのにブランクが使用されると想定されます。

シンタックス・エレメントの前に % シンボルが付く場合、他の箇所で定義されている参照であることを示します。% シンボルの後のストリングは、リテラルではなくシンタックス・フラグメントの名前です。たとえば、2.1 %OP1 という行は別のシンタックス・フラグメント OP1 を参照すべきことを意味します。

以下のワードおよびシンボルが、ドット 10 進数の次に使用されます。

- ? は、オプションのシンタックス・エレメントであることを表します。? シンボルが後に続くドット 10 進数は、対応するドット 10 進数のシンタックス・エレメント、および任意の従属のシンタックス・エレメントがオプションであることを示します。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが 1 つしかない場合、? シンボルはそのシンタックス・エレメントと同じ行に表示されます (たとえば、5? NOTIFY)。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが複数ある場合、? シンボルだけで行に表示され、その後にオプションのシンタックス・エレメントが続きます。たとえば、「5 ?, 5 NOTIFY、および 5 UPDATE」という行を聞き取る場合、シンタックス・エレメント NOTIFY および UPDATE がオプションである、つまりそのいずれかを選択でき、どちらも選択しないこともできることが分かります。? シンボルは、線路型ダイアグラムのバイパス線に相当します。

- ! は、デフォルトのシンタックス・エレメントであることを表します。! シンボルおよびシンタックス・エレメントが後に続くドット 10 進数は、そのシンタックス・エレメントが、同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントすべてのデフォルト・オプションであることを示します。同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントのうち 1 つだけに、! シンボルを指定できません。たとえば、「2? FILE、2.1! (KEEP)、および 2.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、FILE キーワードのデフォルト・オプションは (KEEP) になります。この例では、FILE キーワードを含めてもオプションを指定しない場合には、デフォルト・オプション KEEP が適用されます。デフォルト・オプションは、次に高位のドット 10 進数にも適用されます。この例の場合、FILE キーワードが省略されると、デフォルトの FILE(KEEP) が使用されます。しかし、「2? FILE、2.1、2.1.1! (KEEP)、および 2.1.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、デフォルト・オプション KEEP は次に高位のドット 10 進数 2.1 (関連キーワードを持っていない) にのみ適用され、2? FILE には適用されません。キーワード FILE が省略されると、どれも使用されません。
- * は、0 回以上反復できるシンタックス・エレメントを示します。* シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントが 0 回以上使用できること、つまりオプションであり、なおかつ反復できることを表します。たとえば、5.1* データ域という行を聞き取る場合、1 つまたは複数のデータ域を含めるか、またはデータ域を全く含めないことが可能です。「3*、3 HOST、および 3 STATE」という行を聞き取る場合、HOST、STATE をどちらか一方または両方同時に含めるか、どちらも含めないことができます。

注:

1. ドット 10 進数の後にアスタリスク (*) が付き、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合には、同じ項目を複数回反復できます。
 2. ドット 10 進数の後にアスタリスクが付き、ドット 10 進数の付いた項目が複数ある場合、リストから複数の項目を使用できますが、各項目を複数回使用することはできません。前述の例では、HOST STATE と書くことはできませんが、HOST HOST とは書けません。
 3. * シンボルは、線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。
- + は、1 回以上含める必要のあるシンタックス・エレメントであることを示します。+ シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントを 1 回以上含める必要があること、つまり少なくとも 1 回は含める必要があり、反復できることを表します。たとえば、「6.1+ データ域」という行を聞き取る場合、データ域を少なくとも 1 回は含めなければなりません。「2+、2 HOST、および 2 STATE」という行を聞き取る場合には、HOST、STATE、またはその両方を含める必要があります。* シンボルと同様に、+ シンボルは、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合に限り、その特定の項目のみを反復できます。* シンボルと同様、+ シンボルは線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。

関連概念:

- 109 ページの『アクセス支援』

関連タスク:

- 『キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help』

| 関連資料:

- | • 「SQL リファレンス 第 2 巻」の『構文図の見方』

| **DB2 Universal Database 製品の共通基準認証**

| DB2 Universal Database は、Common Criteria の評価検定レベル 4 (EAL4) で認証
| の評価を受けています。Common Criteria の詳細については、以下の Common
| Criteria の Web サイトを参照してください。 <http://niap.nist.gov/cc-scheme/>

付録 D. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	iSeries
AISPO	LAN Distance
AIX	MVS
AIXwindows	MVS/ESA
AnyNet	MVS/XA
APPN	Net.Data
AS/400	NetView
BookManager	OS/390
C Set++	OS/400
C/370	PowerPC
CICS	pSeries
Database 2	QBIC
DataHub	QMF
DataJoiner	RACF
DataPropagator	RISC System/6000
DataRefresher	RS/6000
DB2	S/370
DB2 Connect	SP
DB2 Extenders	SQL/400
DB2 OLAP Server	SQL/DS
DB2 Information Integrator	System/370
DB2 Query Patroller	System/390
DB2 Universal Database	SystemView
Distributed Relational Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
	zSeries

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アイコン、変更 35
アクセシビリティ機能 109
ドット 10 進数の構文図 110
印刷
PDF ファイル 103
印刷ブックの注文 104
インスタンス
停止 80
インストール
インフォメーション・センター 86, 88, 91
インターフェース言語 74
変更
UNIX 74
Windows 73
インフォメーション・センター
インストール 86, 88, 91
ウェアハウジング
サンプル・データベース 45
オンライン
オンライン・ヘルプへのアクセス 104

[カ行]

カタログ
データベース 67
名前付きパイプ 66
ホスト・データベース
DB2 Connect 67
NetBIOS ノード 65
TCP/IP ノード 64
キーボード・ショートカット
サポート 109
起動
コマンド・ヘルプ 106
メッセージ・ヘルプ 106
SQL ステートメント・ヘルプ 107
クライアント
サーバー接続 63
クライアントからサーバーへの通信
接続のテスト、CLP を使用した 69

グループ
手動作成 36
言語 ID
DB2 セットアップ・ウィザード 75
検査
DB2 のインストール
ファースト・ステップを使用した 45
コード・ページ
サポートされている 74
更新
HTML 文書 95
構成
クライアント/サーバー接続
構成アシスタント (CA) 53
コマンド行プロセッサ (CLP) 63
構成アシスタント
ディスクバリアー機能 58
構成アシスタント (CA)
構成
クライアント/サーバー接続 53
データベース接続、一般 56
データベース接続、Windows および Linux 54
コマンド
catalog database 67
catalog netbios 65
catalog npipe 66
catalog tcpip 64
db2sampl 45
db2start 23, 69
コマンド行プロセッサ (CLP)
インストールの検査 45
クライアント/サーバー接続の構成 63
データベースのカタログ 67
ノードのカタログ 64
コマンド・ヘルプ
起動 106

[サ行]

サーバー
クライアント接続 63
システム管理者グループ
DB2
Windows 23
手動でのデータベースの追加
構成アシスタント (CA) 56
除去
DAS 79

除去 (続き)
DB2
UNIX 78
Windows 77
身体障害 109
製品の概要
DB2 Personal Edition 3
セキュリティ
ユーザー・グループ 49
NIS インストールの注意点 34
接続
プロファイルを使用したデータベース接続 57
接続のテスト
クライアントとサーバーの間 69

[タ行]

チュートリアル 107
トラブルシューティングと問題判別 108
追加
データベース
手動での 56
データベース
カタログ 67
データベース接続
構成
構成アシスタント (CA) の使用 56
ディスクバリアーの使用 58
プロファイルの使用 57
Linux 60
ディスクバリアーを使用した構成
Windows 60
ディスクバリアー機能
データベース接続の構成 58
ディレクトリー・スキーマ
拡張
Windows 2000 および Windows .NET 29
ドット 10 進数の構文図 110
トラブルシューティング
オンライン情報 108
チュートリアル 108

[ハ行]

ファースト・ステップ
検査
DB2 のインストール 45

フィックスパック
適用 43
プロファイル
構成
データベース接続 57
文書
表示 94
ヘルプ
コマンド
起動 106
表示 94, 96
メッセージ
起動 106
SQL ステートメント
起動 107

[マ行]

メッセージ・ヘルプ
起動 106
問題判別
オンライン情報 108
チュートリアル 108

[ヤ行]

ユーザー
手動作成
DB2 Personal Edition (Linux) 36
ユーザー特権、Windows 22
ユーザー・アカウント
インストールに必要な 24
ユーザー・グループ
セキュリティ 49

[ラ行]

例
リモート・データベースへの接続 69
ロケール
サポートされている 74

D

DB2
インスタンスの停止
UNIX 80
インストール
インストールの検査 45
最新のフィックスパックの適用 43
インターフェース言語 74
コード・ページ 74
除去
UNIX 78
ロケール 74

DB2 (続き)
Administration Server の停止
UNIX 79
DB2 Administration Server (DAS)
除去 79
停止 79
DB2 Personal Edition
移行
Linux 13
Windows 7
移行の準備
Linux 13
Windows 7
インスタンスおよびデータベースの移行
Linux 16
インストール
Windows 27
製品の概要 3
データベースの移行
Windows 10
必要なグループおよびユーザーの手動作成
Linux 36
DB2 セットアップ・ウィザードを使用したインストール
Linux 33
Linux でのインストール 36
Windows でのインストール 21
DB2 インスタンス
除去 81
停止 80
DB2 インフォメーション・センター 84
起動 94
DB2 クライアント
カタログ
名前付きパイプ・ノード 66
NetBIOS ノード 65
TCP/IP ノード 64
DB2 システム管理者グループ 23
DB2 製品
除去
UNIX 81
DB2 セットアップ・ウィザード
言語 ID 75
Linux での開始 38
Windows での開始 30
DB2 チュートリアル 107
DB2 の資料
PDF ファイルの印刷 103
DB2 ブックの注文 104

H

HTML 文書
更新 95

L

Linux
移行
インスタンスおよびデータベースの
16
DB2 Personal Edition 13
インストール
DB2 Personal Edition 36
DB2 セットアップ・ウィザードを
使用した 33
作成
必須のグループとユーザーの手動
36
データベース接続の構成
構成アシスタント (CA) の使用
54
ディスクバリーの使用 60
変更
デスクトップ・アイコン 35
DB2 Personal Edition の移行の準備
13
DB2 セットアップ・ウィザードの開始
38

N

NIS
インストールの注意点 34

S

SQL ステートメント・ヘルプ
起動 107

U

UNIX
除去
DB2 78
DB2 インスタンス 81
DB2 製品 81
DB2 インターフェース言語の変更 74

W

Windows
移行
DB2 Personal Edition 7
DB2 Personal Edition でのデータベ
ースの 10
インストール
DB2 Personal Edition 21, 27

Windows (続き)

構成

構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続 54

ディスカバリーを使用したデータベース接続 60

ディレクトリー・スキーマの拡張

Windows 2000 および Windows Server 2003 29

Windows Server 2003 29

ユーザー権限の付与 22

DB2 Personal Edition の移行の準備 7

DB2 インターフェース言語の変更 73

DB2 システム管理者グループ 23

DB2 セットアップ・ウィザードの開始 30

DB2 のインストール

ユーザー・アカウント 24

DB2 の除去 77

IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb> から入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、製品のダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、IBM Worldwide ページ (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。



部品番号: CT2TPJA

Printed in Japan

GC88-9150-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12

(1P) P/N: CT2TPJA



Spine information:



IBM® DB2® Universal
Database

DB2 Personal Edition
概説およびインストール

バージョン 8.2